

# 夕焼けに誓ったあの想 い

エンジェリーブ大佐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺は8年前に住んでいた町を引っ越した。だが、また戻ってきた。

これは俺「一ノ瀬朝陽」（いちのせあさひ）とその5人の幼馴染のうちの一人、美竹蘭とのお話。

# 目次

幼馴染たちとまた	1
夕焼けに誓うこと	11
先輩に恋愛相談	23
幼馴染の1人から告白された	33
友達にライブに誘われた	39
AfterglowとRoseliaの	48
ライブ	48
ライブのその後 (Roselia編)	54
ライブのその後 (Afterglow編)	64
約束事 (モカ編)	72

約束事 (巴、ひまり編)	77
約束事 (ひまり編、後編)	91
約束事 (つぐみ編、前編)	102
約束事 (つぐみ編、後編)	119
美竹家にお邪魔します	130
いつも通りの日常がまた	144
羽沢珈琲店で	154
恋愛相談 (改)	161



## 幼馴染たちとまた

いつぶりだろう。この町に帰ってきたのは。

俺「一ノ瀬朝陽」（いちのせあさひ）は、8年前に住んでいた町から引越してしまった。理由は親の転勤だ。

俺には5人の幼馴染がいた。引越す際にあいつらが泣きながら俺の事を見送ってくれたのを今でもおぼえてる。あいつら今頃何してるんだろう。もしかして俺のこと忘れてるかもしれない。そう思うと目が熱くなってきた。

朝陽

「今日から俺も高校生だもんな。あいつらに会えるといいな。」

そう呟きながら歩いていると、前に5人組の女子達が歩いているのを見かけた。あいつらにそっくりだなあ。すると、5人組のうちの1人が後ろを向き、こちらを見つめて話しかけてきた。

ひまり

「朝陽？朝陽なの？覚えてる？私たちのこと」

朝陽

「え!?ひまり？」

ひまり

「そうだよ！朝陽！覚えててくれてたんだね！」

涙目になりながらひまりが言った。

巴

「おい、ひまり！どうしたんだよって朝陽なのか？久しぶりだなあ。いつぶりだ？」

モカ

「あーくんひさひぶり〜」

つぐみ

「朝陽くんなの？久しぶり！」

蘭

「久しぶり。朝陽。」

朝陽

「みんな！久しぶりだな！8年ぶりくらいか？」

まさかこんなにも早く会えるなんて思ってた。

おっと、紹介がまだだったな。

こいつらが俺の幼馴染の上原ひまり、宇田川巴、青葉モカ、羽沢つぐみ、美竹蘭である。みんなすっかり変わったなあ。蘭なんか赤いメッシュ入れてるし。ひまりなんか……いや、なんでもない。ここは言っちゃいかん。

朝陽

「感動の再会を楽しむのもいいけど早くしないと入学式遅れるよ？」

巴

「そうだな、って朝陽も羽丘なのか？」

朝陽

「そうだよ。もってことはみんなも羽丘？」

ひまり

「もちろん！あたしたちも羽丘だよ！」

ひまり、胸張って言うなよ……目のやり場に困る。デカイんだから……

つぐみ





「今年はみんなと同じクラスがいいな」

モカ

「おお。蘭がデレてる」

蘭

「ちよつ！モカ！からかわないで！」

朝陽

「ひよつとして、俺がいない間に蘭だけ別のクラスになってたりした？」

巴

「そうだな。中2のときに蘭だけべつのクラスになっちゃって」

朝陽

「そうなんだ。今年は俺もみんなと同じクラスがいいな！」

俺は笑顔でみんなにそう言った。

この学校は入学式が終わったあとにクラス発表らしいので入学式が終わるまで自分が何組になっているのかわからない状態なのである。俺は何組になってるんだろうか。

校長のくだらない話が終わって入学式がようやく終わった。

本題のクラス発表である。俺とみんなのクラスは…

巴

「アタシはB組だ。」

ひまり

「わたしもだよ！」

つぐみ

「私もB組だよ！」

モカ

「あたしもだよ」

蘭

「…」

朝陽

「俺はA組だったよ…みんなとは離れちゃったな…」

蘭

「え!? 朝陽、A組なの? だったらあたしと一緒にだよ!」

朝陽

「お! マジか! よかったー。みんなと離れ離れかと思ったよー。蘭がいてくれてホッとしました!!」

蘭

「／＼／＼／」

モカ

「蘭く。顔、赤いよ？」

蘭

「モカ！うるさい！！」

巴

「そう言つて、本当は嬉しいんだろ？朝日と同じクラスになれて」

蘭

「別に！嬉しくない！」

ひまり

「蘭く。耳まで真っ赤になつてるよ。」

つぐみ

「みんな、その辺にしとこうよ。蘭ちゃんが可哀想だよ。」

朝陽

「みんな、ほんと變わらないな。」

朝陽以外

「あんたのそういう鈍感なところもね」

朝陽

「そうか？」

朝陽以外

「そうだよ！」

そう言われて各々自分のクラスへ行つた。

俺はみんなのあの言葉が気になっていた。俺が鈍感つてどういうことだ？

蘭

「朝陽、これからよろしくね」

朝陽

「何改まつてんだよ。俺たち、幼馴染だろ？」

蘭

「あんたつてほんとに鈍感。」

朝陽

「どこが？」

蘭

「そういうところ。みんなも多分わかってる。」

（あたしが朝陽のこと好きなのみんなも分かってるよね。）

そんな話をしていると担任がやってきて話が中断してしまった。

放課後

朝陽

「みんな、新しいクラスどお？」

巴・モカ・ひまり・つぐみ

「最高のクラスになりそうだよ!!」

朝陽

「そうか。よかったじゃん!!」

蘭

「あたしたちのクラスも面白そうだよね。それと、今年には朝陽と……／／／」

朝陽

「ん？俺となんだって？」

巴

「なあ、朝陽。お前、本当に分からないでそんなこと言ってるのか？」

ひまり

「ほんっと、朝陽って鈍感。」

モカ

「あーくんどんかーん」

つぐみ

「こればかりは私も呆れちゃうよ」

朝陽

「つぐみまでー？本当にわからないんだってば!!」

そんな話をしながら桜並木の道を歩きながらみんなと帰った。

それにしても鈍感ってなんのことだろ？

みんなと他愛もない会話をしなげらずと考えていた。

それと、なぜか蘭の顔が赤くなってるように見えたけど、気のせいだよな!!

## 夕焼けに誓うこと

入学式が終わって約1ヶ月、何ら変わりなく過ごしてきた今日この頃。桜の木もだいぶ葉桜になってきて暦はGWである。そこで、俺は幼馴染にバンドの練習を見に来ないかと誘われたところだった。

LI〇E内で

蘭

「明日、あたし達のバンドの練習があるから朝陽も来て」

朝陽

「なんで？」

蘭

「朝陽にも見てもらいたいからだよ。あんたがいない間にあたし達はバンドを組んで今のあたし達の「いつも通り」を朝陽にも見てもらいたい」

朝陽

「分かった。行くよ。で、何時にどこに集合？」

蘭

「Circleに1時集合でいい？」

朝陽

「いいよ、行ける」

蘭

「ありがとう」

とまあこんな感じで誘われたわけだから俺の貴重なゲームの時間を割いてAfterglowの練習に行くってわけになっちゃってな。あ、このこと、蘭たちには内緒にしとかないうるさいから静かにしないと。

俺は集合時間の10分前にCircleに来ているわけなのだが、まだ来ないな。ま、それもそうか。さすがに10分前じゃ来ないよな。カフェで暇つぶしするかと思つたらAfterglow全員がやってきた。

ひまり

「朝陽、お待たせ。」

つぐみ

「朝陽くん、待った？」



巴

「よっ！朝陽！待ったか？」

モカ

「あーくん、お待たせ〜」

蘭

「朝陽、もういたんだ。ま、いつもの事だね。早く行こ。」

朝陽

「いや、俺もさつき来たところだから大丈夫だよ。それより早くみんなの練習見たい!!」

そうして俺たち6人はCircle内へと入っていった。

まりな

「いらつしやーい。みんな、そっちの男の子は？」

朝陽

「こんにちは。はじめまして。Afterglowの幼馴染の一ノ瀬朝陽です。よろしくお願ひします。」

まりな

「朝陽くんね。よろしく。私は月島まりな。ここCircleのオーナーみたいなのを

務めてるの。」

ひまり

「まりなさーん、部屋はどこですかー？」

まりな

「3番だよ。はいこれ、鍵。」

ひまり

「ありがとうございます。」

俺たちはスタジオへと足を運んだ。みんなの気合いに満ちた表情が素人から見ても分かるくらいに今日の練習は気合が入ってるんだろなあ。どんなのを見せてくれるのか楽しみだ。

蘭

「朝陽はそのパイプ椅子出して適当に座つといて」

朝陽

「りよ」

しばらくしてみんな準備ができたみたいだ。さつきから俺の興奮がすげー止まんね

えよ!!うずうずしてきた!!楽しみだー!!

モカ

「あーくん、すごい楽しみ〜っていう表情だね〜」

朝陽

「そりゃあそうだよ!!俺がない間にバンド結成してるなんて知らなかったし!すげー楽しみだよ!!」

蘭

「みんな、朝陽がいてもいつも通りやれば大丈夫。あたし達のいつも通りが必ず朝陽の期待を上回る。だから、いつも通り演奏するよ!!」

ひまり・モカ・巴・つぐみ

「「「おーーーーー!!!」」」

蘭

「まずは1曲目Scarlet sky」

一言で言うと、蘭たちの演奏はやべー!!すげー上手いし興奮が止まんねえよ。あ、終わった。もう1曲目終わりか。早かったなあ。今の俺、語彙力の低下半端ない気がする。(笑)

蘭

「どうだった？」

朝陽

「凄いよ!!これはやばい!!すげー!!」

モカ

「あーくん、語彙力低下しすぎ。でも嬉しいよ!ありがとうね。」

巴

「ありがとうな、朝陽!」

つぐみ

「朝陽くん、ありがとう!」

ひまり

「これくらい当然よ!」

蘭

「ありがとう…／＼」

なんか蘭の顔がまた赤くなってるような気がするんだが。まあ気にしなくて大丈夫

だろ。

そのあと、2、3曲とその他諸々の練習を見てCircleをあとにした。

そして、今はファミレスでみんなでお茶をしている。今日の練習の感想を含め、俺が向こうで何してたかとか蘭達は何やってたかを話していた。

外に出る頃にはもう夕方だった。綺麗な夕焼けが見える。向こうでも夕焼けは何度も見てきたけど、こいつらと見る夕焼けはなんか違う気がする。やっぱこいつらだからかな。夕焼けがいつそう輝いて見える。

ひまり

「見て見て！夕焼けだよ!!」

巴

「ほんとだ!!すげー綺麗だな!」

つぐみ

「きれーい」

モカ

「これは凄いですな〜」

蘭

「なんか違う。今までの夕焼けよりいっそう輝いて見える。」

蘭以外

「「「蘭も思ってたの？（か？）」「」」」

蘭

「う、うん。」

ひまり

「だよね！だよね！私もそう思うもん！」

巴

「アタシもだよ」

モカ

「あたしも〜」

つぐみ

「私だってそう思ってるよ。もちろん、朝陽くんだってそうだよね？」

朝陽

「当たり前前だろ？」

蘭

「: // // // //」

朝陽

「蘭？どうした？」

蘭

「別に、何も」

そう言うと、蘭はそっぽを向いてしまった。俺、そんなやばいこと言ったか？いや、言っていない。

巴

「いい加減気づいてやれよ。もう見てて呆れてくるぜ。」

ひまり

「ねー、ほんとにねー」

モカ

「もー、嫌になっちゃう〜」

つぐみ

「みんなと同意見です。」





巴 side ー

アタシは朝陽が好きだ。幼馴染としてじゃなくて、異性として。これは多分ひまりと蘭も同じだと思う。特に蘭は。蘭はわかり易すぎるんだよな。朝陽は鈍感だから十分アタシにもチャンスはある！朝陽を落としてみせる！

その決意をこの夕焼けに、あえて6人全員がいるところで誓った。

ひまり side ー

私は朝陽が好き。幼馴染としてじゃなくて、異性として。これは多分巴と蘭も同じだと思う。特に蘭は。蘭はわかり易すぎる。私は朝陽と付き合いたい。私にも十分朝陽を落とせるチャンスはある！朝陽を落としてみせる！

その決意をこの夕焼けに、あえて6人全員がいるところで誓った。

朝陽 side ー

蘭と巴とひまりが同じようなことを思っているんだろうと思う。でも、俺にはそれが分からない。今の俺にはまだ。誰が好きなのかわからない状態だ。極端に言えば3人同時に告白してきて誰かひとりを選べと言われたら、恐らく選べない。だから、俺はこの夕焼けに、この気持ちの正体を晴らすためという決意を誓った。

そうだ、明日リサ先輩に相談してみよ！あの人ならなんかわかりそうな気がする。

## 先輩に恋愛相談

俺は今、リサ先輩とファミレスで待ち合わせをしていた。理由は、相談事をするためだ。リサ先輩ならきつと今の俺の気持ちの正体がわかりそうな気がしたからだ。

リサ

「あ、朝陽！もう来てたんだね☆」

朝陽

「リサ先輩！待ってましたよ！」

リサ

「ごめんごめん、今そつち行くね」

リサ先輩が来たので、色々注文等を済ましてから雑談をしていたら注文した商品が来た。俺はコーヒーで、リサ先輩はケーキと紅茶を注文した。

朝陽

「いかにも女性らしいもの注文しましたね。」

リサ

「ちよつと、朝陽。失礼だよ、その言い方。」

朝陽

「すみません。俺、普段そういうの食べないんで」

リサ先輩に失礼なことを言ってしまったらしく、リサ先輩は少し不機嫌になってしまった。俺は焦りながら謝り、なんとか機嫌を直してくれた。女性ってこういうところ怖いんだと改めて分かった。

リサ

「いいよ、大丈夫。ところで、アタシに相談ってなんなの？」

朝陽

「実は、俺に好きな人というか、気になる人？が何人かいるんですよ。俺の中では多分その中に好きな人がいるんだろうなって思う人があると思うんですけど、誰なのかが分からなくて…」

リサ

「んー、難しいねー。朝陽はさ、その中の誰か一人のことを考えると、胸が痛くなるとかそういうのってない？」

朝陽

「一人いますね。」

リサ

「じゃあその人のことが好きなんだよ！アタシはそう思うな。」

俺の相談をここまで簡単に解決してくれるリサ先輩ってすごいなって思った。リサ先輩はすごい人なんだと思った。でも、こんな簡単に好きかどうか決めてもいいんだろうか。俺はそんな疑問を抱いた。

リサ

「もしかして、こんな簡単に好きかどうか決めていいの？って思ってたりする？」

朝陽

「え!?なんでわかったんですか？」

リサ

「顔におもいつきりでてたよ？」

朝陽

「マジっすか!?リサ先輩、ほんとすごいですね！」

リサ

「えへへー、褒めても何も出ないよー?」

一瞬だが、リサ先輩に見惚れてしまった。この人って元から美人だし照れてるの可愛  
いって思ってしまった。そんな自分が恥ずかしい。この人のおかげで蘭のことが好き  
だって分かったんだから。これだけは曲げない。

リサ

「あ、そうだ! 朝陽さ、他にも何人か気になる人いるって言ってたよね?」

朝陽

「はい、言いましたね。」

リサ

「アタシの解釈だと、その人たちのことは友達としての好きだと思うよ。多少気にな  
るってだけで心から好きだとは思わない。だから、朝陽が心から好きなのはきつと、蘭  
のことなんじゃないかな?」

朝陽

「!!!」

リサ

「凶星だねー☆」

なんと、リサ先輩は俺の好きな人まで当ててしまった。この人、ほんとに凄いな。なんで俺が蘭のこと好きだなんて分かったんだろう。蘭のことが好きだとバレてしまつては正直に言うしかない。はぐらかしたら後が怖そうだ。

朝陽

「はい。俺は蘭のことが好きです。／／／」

リサ

「やっぱりねー☆蘭のことは友達としての好きじゃない。異性としての好きだから。そこは分かつてる?」

朝陽

「はい、分かつてます。」

リサ

「ならもう大丈夫だね!」

朝陽

「はい！今日はありがとうございます。あ、俺、奢りますよ？」

リサ

「ほんと!?じゃあお言葉に甘えちやおうかなー？」

そうして、俺は会計を済ませてリサ先輩とファミレスを後にした。リサ先輩にはほんとうに感謝してる。あの人って凄いな。そのあとはリサ先輩と雑談しながら家まで送った。多少はいじられたけど。でも、感謝してる。リサ先輩は凄いなあ。

そんなことを考えてると、前から知り合いが来た。

巴

「あれ、朝陽じゃんか！」

朝陽

「巴か！バンド練習の帰りか？」

巴

「そんなとこだな。朝陽は何してたんだ？」

朝陽

「ちよつとな。」



巴

「なんだよ、それ。アタシに言えないようなことしてたのか？」

朝陽

「そんなことしてるわけないだろ。リサ先輩に相談してたんだよ。」

巴

「そうだったのか。疑って悪かったな。」（今言うか？でも、今なら誰もいないし、二人きりだから言うチャンスだよな。よし、今言おう！）

巴

「なあ、朝陽。今大丈夫か？」

朝陽

「まあ大丈夫だけど、」

巴

「ちよつと話したいことがあるんだ。いいか？」

朝陽

「いいよ、OK」

巴

「ありがとな。」

「そうして俺たちは公園のベンチに腰掛けた。俺はコーヒーを買うために少し席を外した。巴のを買ってか。」

巴

「あー、緊張するー。告白なんて生まれて初めてだからなー。頑張んねえと。もしかしたら、朝陽と付き合えるかもしれないし。」

朝陽

「買ってきたぞ。」

巴

「わあああああああああああああああああああ」

朝陽

!!!!!!

「どうしたんだよ、急に大声出して叫んでよ。まるで俺が不審者扱いされてるみたいじゃねえかよー。」

巴

「ごめんごめん、びっくりしただけだから。ほんとにごめん。」

朝陽

「ならいいけど、話つてなに？」

巴が急に大声出して叫んでびっくりしたが、決して怒ってるわけじゃない。俺もビツクリして少し素っ気ない返しをしてしまった。だが、巴がやばいやつだとは微塵も思つてない。巴に悪いことしたな。攻めて話とやらをちやんと聞こう。

---

巴 side

アタシが告白のこと考えてたら朝陽が後ろから急に声をかけてきてびっくりしてつい大声を出して叫んでしまった。朝陽に絶対やばいやつだつて思われたよな。でも、朝陽とアタシは幼馴染だからそんなことないって信じてるけどな。これから告白するかマジで緊張する。心臓バクバクしすぎて止まんねえな。なんとか平常を保つて告白できるように頑張ろう。

---

朝陽 side

巴の話を聞いたらすぐに送って帰ろう。初夏でもまだ夜は冷える。ちよつと寒いな。コーヒー、ホットにするべきだったかな。アイスにしたのは間違いだつたな。巴の話を聞くのを早く終わらせたいわけではないが、寒いからとりあえず早く帰りたいだけだ。夜まで外にいるつもりなかつたから薄着できちやつたんだよな。あー、さみー。

そういえば、俺とリサ先輩が出会った経緯を話してなかつたな。俺とリサ先輩の初めての出会いは、4月の中旬頃にあつた Rose lia のライブに行つたときだつた。同じクラスのやつに誘われて行つたのだが、とにかく凄かつた。その帰りに友達とファミレスで Rose lia のライブの感想を話し合つていたら、そこに Rose lia がいたんだ。リサ先輩は俺たちの会話が聞こえたらしく、俺たちの席まできて感想を聞ききたのが始まり。そこで俺と俺の友達とリサ先輩の初めての出会いだったというわけ。

## 幼馴染の1人から告白された

巴

「実はな……」

なんか深刻そうな話すんのかな…それだったらあまり聞きたくねえな。それでも巴の話の話を聞くと言ったからにはちゃんと聞かないとな。巴に限って深刻そうな話ってわけじゃないだろうけどな。

朝陽

「どっしt…!!んん!!」

俺は巴に何されてる？キスされてるのか？あ、キスされてる。それを理解するのに俺の頭だと数十秒かかった。キスされたってことは…そうか。そして、唇が離れた。

巴

「今ので分かったと思うけど、アタシ、朝陽のことが好きなんだ。だから、アタシと付き

合ってくれないか？／／／／」

やっぱりそうか。巴、俺の事好きだったのか。しかも、顔赤いし。やべー、巴ってこんなに可愛かったか？あー、やばいやばい、危うく巴に墮とされるとこだった！俺の好きなやつは蘭なんだ！巴じゃない。だから、ここは保留せずに素直に断ろう。

朝陽

「悪いけど、俺は巴と付き合えない。今日、リサ先輩に言われたんだよ。朝陽の好きな人は蘭なんじゃない？って。俺、蘭の名前出てないのにリサ先輩、俺の好きなやつの名前当ててくるってヤバイよな。巴の気持ちは素直に超嬉しいよ。幼馴染としての好きじゃなくて、異性としての好きだったのは分かった。けど、さっきも言ったけど俺の好きな人は蘭なんだ。だから、巴とは付き合えない。ごめん、ほんとにごめん。」

巴

「そっか。朝陽、蘭のこと好きなのか。朝陽って鈍感だから好きな人なんかいねえのかと思ってた。朝陽の気持ちがあがれて良かったよ。ありがとな。」

朝陽

「なんかデイスられた気したけどそういうわけなんだ。ごめんな。」

巴

「大丈夫だって。時間取らせて悪かったな。じゃあ、アタシは帰るよ。じゃあな!!」

朝陽

「じゃあな!!」

巴に悪いことしちゃったよな。目、潤んでたし。恋愛ってこういうことなんだろうな。もし、蘭にフラれたら俺もああなるんかな? 巴みたいに泣きそうな気がする。巴、ほんとにごめん。俺はもう一度、心の中で巴に謝罪した。

巴 side

アタシは朝陽にフラれたのか。あの場に耐えきれなくてすぐに帰ってきちゃったけど、大丈夫だったのか? やばい。また涙出てきた。朝陽の前ではなるべく泣かないようにしてたけど、1人になるとやばいな。涙ってこんなに止まらないもんなんだな。家に着いても涙が止まらなかった。あこに心配されたな。なんとか理由つけて大丈夫って言っておいたけど。今はほんとに1人になりたい。ずっと泣いてたい。思いきってキ

スもしたけど、やっぱりダメだったな。今でもキスした感触、少し残ってるな。

このあと、アタシは一晩涙が枯れるくらい泣いた。ご飯は食べてない。食欲なかったしな。正直、ほんとにつらかった。気付いたら朝だった。泣き疲れて寝ちやつたんだな。ノツクの音が聞こえた。あこが部屋に入ってきた。

あこ

「おねーちゃん、大丈夫？昨日、ずっと泣いてたよね？なにかなきやそんなに泣かないよね？あこ、おねーちゃんが長時間泣いてるの初めてみたから結構心配になっちゃって。」

巴

「分かってたのか。あこには話すよ。実はな、」

巴

「昨日、朝陽に告白したんだよ。朝陽のことが好きなんだ。アタシと付き合ってくれなにか？って。それを言う前にキスしたんだよ。でも、結局ダメだった。朝陽にフラれちやつたんだよ。俺には好きな人がいるから巴と付き合えないって。それで昨日、一晩中泣いてたんだよ。」

あこはアタシの話を真剣に聞いてくれていた。あこは少し疑問を顔に出しながらも、だいたいは理解してくれているようだった。

あこ



「あこ、恋愛とかはちよつと疎いけど、好きな人にフラれるっていう気持ち、分かるよ。それ、すごく辛いよね。あこは恋愛経験ないけど、すごいわかるよ。おねーちゃんの気持ち、すごくわかる。一晩中泣きたくなる気持ちも。全部は分からないけど、ほとんど理解してるよ。大丈夫だよ！おねーちゃん!!」

巴

「あこ、ありがとな。わざわざアタシの心配してくれて。ほんとにありがとな。」

アタシはあこの優しさに涙がまた溢れてきた。あこがアタシを抱きしめてくれた。

あこ

「泣いていいよ。おねーちゃん、辛かったよね。朝陽兄とはまたいつも通り幼馴染に戻るよ。朝陽兄もおねーちゃんに会えなかったら悲しがるよ。気が済むまで泣いていから、今は。大丈夫だよ。おねーちゃん。」

巴

「あこ、ほんとにありがとう。」

アタシは気が済むまであこに甘えて泣いた。妹の前で恥ずかしいけど、今はあこに甘

えさせてもらおう。あこの優しさに感謝して。このあと、気が済むまで泣いて、また眠りについていた。

## 友達にライブに誘われた

巴に告白されてから2ヶ月半くらいが経った。羽丘は終業式の最中だった。どこの学校もそうだけど、校長の話長えーな。ふわあぁー、あくび出てきた。ねみー。この学校は男女混合の出席番号順に並んでいるので、俺は前から2番目だ。1番前は、この間、Roseliaのライブに誘ってくれた「足立陽真」(あだちはるま)だ。こいつが俺が羽丘に入学してできた初めての友達だ。陽真、お前、寝てるよな…。隣には、B組が並んでいる。俺の隣はモカだ。言わなくても分かるだろうが、立ったまま夢の中に入り込んでいる。こいつ、ある意味凄いやな。その技術、学びたいわ。そんなことを考えていると、校長の話が終わって、夏休みの過ごし方をうんたらかんたら話され、聞き流した。ようやく長かった終業式が終わった。

朝陽

「陽真、お前、寝てただろ？」

陽真

「寝てました。バレてたか？」

朝陽

「注意はされてなかったけど、何人かの先生はお前のこと見てたぞ？」

陽真

「なんも言われなければOKだよ！」

朝陽

「いや、威張ることじゃないと思うんだけど……一番前なのによく寝れるな。」

陽真

「まあね!!」

朝陽

「だから威張ることじゃねえってば!!」

陽真とそんな会話をしながら教室に戻った。夏休み、何しようかなー？ やっぱりNF  
Oかな。それとも、みんなで遊びまくる？ まだ何も決まってないし、追追決めてこ。

陽真

「なあ、朝陽。もうすぐRoseliaのライブがあるらしいんだよ。今度行かねーか

「？」

朝陽

「行く行く！他に出演するバンドとかっているのか？」

陽真

「Afterglowってところが出るらしいぜ。」

朝陽

「なら尚更行く！絶対行こうぜ！！」

陽真

「お、おう。」

陽真からRoseliaとAfterglowのライブに誘われた。Afterglowのライブは本格的に見るのは初めてだ。まだ蘭達からライブあるって言われてねえもんな。またあの音が聞けるって今からでも待ち遠しい！早くライブ当日にならないかなあー！

朝陽

「そういえば、いつなんだ？」

陽真

「今度の日曜日」

朝陽

「OK！予定空けとくわ。」

陽真

「ありがとな。今度はRoseliaの人としりあえるといいな。」

朝陽

「お前、あの時すぐ帰っちゃったもんな。あの時、俺と一緒にいればリサ先輩と知り合えたのにな。」

陽真

「ほんと後悔してる。今度は知り合いたいな。」

朝陽

「頑張れよ！」

陽真

「おうよ！」

そんな会話をしていると、担任が来た。早く終わんねえかな。あんたのくだらない話

なんか聞きたくねえから。が、意外と早くHRが終わった。

蘭

「朝陽、一緒に帰ろ。巴たち待ってるよ。」

朝陽

「そうだな。じゃ、陽真、今度の日曜日な！」

陽真

「ああ、じゃあな！」

陽真はまだ、蘭がAfterglowのギタボだとはまだ知らない。というか、言っていない。あいつの驚く顔が見たいから。早くライブ当日になんねえかなー。

蘭

「おまたせ。」

モカ

「らんー。またあーくんとイチャイチャしてたの〜？」

蘭

「違う!!そんなんじゃない!!ただ一緒に帰ろって誘っただけだし／／／」

モカ

「ふーん、そーなの?あーくん?」

朝陽

「そうだけど?」

ひまり

「朝陽ってこんな素っ気なかったっけ?」

つぐみ

「言われてみれば!!」

朝陽

「そうか?俺としてはいつも通りのつもりなんだけど。」

朝陽

「それより、早く帰ろうぜ!ここで立ち話もあれだろ?帰り、つぐみん家よってそこで話そうぜ!つぐみ、それでいいよな?」

つぐみ

「う、うん。私はそれで大丈夫だよ!」

朝陽



「よーし、今からつぐみん家にいこー！」

ようやく帰れそうだ。みんな、後で仕返しするからな。帰路についてしばらく歩いたところで蘭が口を開いた。

蘭

「そういえば、巴、学校にいる時から何も喋ってないよね？」

ひまり

「あー、確かに!!」

つぐみ

「いつもの巴ちゃんなら、もうすこし喋るよね。」

モカ

「トモちくん？ひよつとして、何かあった？」

モカが小さい地雷を投げ込んでしまった。モカ、やめてあげてくれ。その件は、俺にとつてもつらいから。

朝陽

「その辺にしといてあげたら？ 巴にもいろいろあるだろうし。」

ひまり

「そうなの？ 巴？ ごめんね？」

巴

「別に気にしなくていいって。心配かけて悪かったな。」

そうして、つぐみの家、羽沢珈琲店についた。みんなで他愛もない会話をたくさんした。一学期、なにがあつたかとかいろいろと。そして、解散する直前に、

蘭

「そうだ、朝陽。今度の土曜日、あたしたちのライブがあるの。無理にとは言わないけど、来る？」

朝陽

「わりー、今度の日曜日、陽真と遊ぶ予定入っちゃってるんだよ。悪いけど、今回は行けないかも。」

蘭

「そう。分かった。」

ひまり

「朝陽、来れないのかー。残念。」

モカ

「モカちゃんも悲しいよ。よよよ」

巴

「朝陽、来れないのかよ。残念だな。」

つぐみ

「みんな、朝陽くんだって予定があるんだからその辺にしといてあげようよ!!」

朝陽

「みんな、ごめんな。予定が入ってなければ絶対行ってたけど。」

行けないなんていうのは嘘。陽真との約束だってAfterglowとRoseliaのライブに行くための予定だし。みんなの驚く顔が見たくてな。ごめんな、嘘ついて。でも、絶対行くから。期待してるから、『いつも通り』頑張れよ。

# AfterglowとRoseliaのライブ

とうとうAfterglowとRoseliaのライブの日だ。早く陽真こねーかな？Circle前のカフェで俺たちは待ち合わせをしている。俺がライブに来て蘭達、どんな顔すんのかな。楽しみだ。

陽真

「すまん、朝陽。待ったか？」

朝陽

「ギリギリセーフだな。待ったけど、待ち合わせ時間はオーバーしてないからだいじょうぶだせ。」

陽真

「よかったー！早く中入ろうぜ！」

朝陽

「そうだな。俺も早く中入りてえーよ!!」

俺たちはすごいテンションが上がっている。俺の場合は知り合いと幼馴染がライブをやるから。陽真は Roselia のファンだから。早く見てえーな。しばらく、テンションが上がりがりながら他愛もない会話を陽真としていると、Afterglow のライブが始まった。

蘭

「どうも。Afterglow です。さっそく、1 曲目。Scarlet sky」

蘭の MC とともに、ライブが始まった。前、俺が練習を見させてもらった時より遙かに上手くなってるな。これ、やばすぎだろ！陽真なんか聞き入ってるし。気づいたら 1 曲目が終わった。

蘭

「ありがとうございます。!!!! 2 曲目は That Is How I Roll  
1!!」

「蘭は俺たちにきづいたのだろうか、驚いた表情を一瞬見せた。そういえば、陽真は1曲目のときから驚いた顔してたな。まあ、理由は何となくわかるけど。しっかしこの曲もやべーな。おまえら、ほんとすごいよ！素直に尊敬するよ！」

2曲目もあつという間に終わってしまった。

蘭

「ご清聴、ありがとうございます。以上、Afterglowでした。次はRoseliaです。」

「すげー。呆気に取られたまま立ち尽くしていた。すると、Roseliaのボーカルらしき人がMCを始めた。」

友希那

「どうも。Roseliaです。私はボーカルの湊友希那です。Afterglowのライブはどうでしたか？私たちはAfterglowに負けなくらいのライブをしてみせます。お聞きください。1曲目、BLACK SHOUT」

湊さんのMCのあとにライブが始まった。この間見た時よりもだいぶ違うな。素人から見ても分かるくらい上達してる。そして、1曲目が終わった。

友希那

「ありがとうございます。では、2曲目、LOUDER」

2曲目、難しそうな曲だな。みんな必死に演奏してる。俺がやるなんて到底無理だ。あんな演奏見せられたらもう、やばい！スゴすぎる！そして、2曲目が終わった。

友希那

「ご清聴ありがとうございます。以上、Roseliaでした。」

こうして、ライブが終わった。俺と陽真はそのまま立ち尽くしたままだった。気づいたら、周りに人が4、5人程度しか残ってなかった。

朝陽

「やっべー！どっちも凄かった！なあ、陽真、ファミレスで語り合おうぜ！」

陽真

「そうだな！この感動を誰かと共有したいぜ！早く行こーぜ！」

俺たちはファミレスに向かった。着いて、ドリンクバーを注文し、そこからずっと喋っていた。Afterglowすげーとか、Roseliaすげーとか。そんな会話をしていた。

陽真

「そういえば、Afterglowのボーカルってうちのクラスの美竹さんだよな？正直、驚いた。美竹さんってすげーな。普段、おとなしいし、やばかったよ!!」

朝陽

「驚いただろ？陽真の驚く顔が見たくてな。蘭、いや蘭達、凄かっただろ？」

陽真

「その言い方だと一回目じゃねえな。てか、名前呼びかよ。お前らってそんな中だったのか？」

朝陽

「言ってなかったか？俺とAfterglowは幼馴染だぞ？」



陽真

「どうりで美竹さんと一緒に帰ってたのか。納得したわ！」

朝陽

「正確にはAfterglowと、だけどな。」

陽真、すげーテンション上がってるな。こいつ、テンション上がりすぎてやばくなってる気がするが、今回は多めに見よう。俺もテンション上がってるし。そんな会話をしている、Roseliaが来店してきた。俺と陽真は頭の上でつかい！が2つ上がった。

## ライブのその後 (Roselia編)

俺と陽真が今日のライブについて話していると、Roseliaが来店してきた。俺たちは2人して間抜け顔。まさか来るなんて思わないから。すげー驚いた。

リサ

「あー！朝陽だ！やつほ☆」

朝陽

「こんにちはです。リサ先輩。」

リサ

「ねえ、朝陽。相席大丈夫？」

朝陽

「俺たちはいいんですけど、Roseliaのみなさんは大丈夫ですか？今日、ここにきたのって、ライブの反省会みたいなのをやるためじゃないんですか？」

リサ

「いいよねー？みんな？」

友希那

「ええ、構わないわ。」

紗夜

「私も構いませんよ。」

あこ

「あこも大丈夫だよ！」

燐子

「わたしも……大丈夫……です。」

リサ

「そういうことでー。店員さん、相席でお願いしまーす!!」

そんな形で Roselia 一同と相席をすることになった俺たち。本当に大丈夫なのか？まあ、そんな深く考えなくてもいいよな。陽真、あまり顔に出さないようにしてるんだろうけど、嬉しいって顔に書いてあるし。(笑) まあいいか！これはこれで楽しくなりそうだしな！

リサ

「今日、2人ともライブ来てくれたよね？アタシ達のライブどうだった？」

朝陽

「最高でしたよ!!時間忘れるくらいに迫力ありました!!」

陽真

「俺も朝陽と同意見です!めっちゃ凄かったです!」

朝陽

「すいません、俺たち、興奮すると語彙力皆無になるんでそこんどこよろしくです。」

リサ

「大丈夫だよ!!ありがとうね!!」

俺たちの語彙力の低い感想でもリサ先輩はちゃんと受け入れてくれたようだ。それは、ほかのメンバーも同様であった。語彙力低くて申し訳ないです。俺は心の中で謝罪した。あ、そういえば、

陽真

「そういえば、自己紹介まだでしたね。」

朝陽

「陽真ナイス!!今俺も言おうと思ってた!!」

陽真

「じゃあ、俺から。足立陽真です。羽丘に通ってる高一です。趣味は料理です。よろしくお願いします。」

朝陽

「一ノ瀬朝陽です。陽真と同じく羽丘に通ってる高一です。Afterglowとは幼馴染です。趣味はゲームですかね。よろしくお願いします。」

リサ

「今井リサだよ。Roseliaでベースやっています。羽丘に通ってる高二だよ。趣味は編み物と料理!よろしくね☆」

紗夜

「氷川紗夜です。Roseliaでギターをやっています。花女に通ってる高二です。趣味はギターを弾くことです。よろしくお願いします。」

燐子

「白金燐子です…。Roseliaで…。キーボードをやっています。花女に通ってる高二…。趣味はオンラインゲームと…。クロスワードです。…。よろしく…。お願いします」

…。」

あこ

「宇田川あこだよー！Roseliaでドラムをやってるよ！あこはね、世界で2番目に上手いドラマーなんだ。世界で1番はおねーちゃん！趣味はオンラインゲーム！よろしくです！」

友希那

「最後は私ね。湊友希那。Roseliaでボーカル兼リーダーをやっているわ。羽丘に通ってる高二よ。趣味は、特にないわね。よろしく。」

こうして、各々自己紹介を済ませた。リサ先輩はこの前知り合ったから知ってる。あのことは、巴からよく聞いている。みんな、どんな人なんだろ。決めつけるのはあまり好きじゃない。どういう人か知って初めて人の性格が見えてくると俺は思うから。

友希那

「一ノ瀬くん。あなた、Afterglowと幼馴染って言ったわよね？」

朝陽

「ええ、言いましたけど…。」

友希那

「Afterglowのライブの感想も聞きたいの。もちろん、足立くんの感想も。私たちのライブを見たってことはAfterglowのも見たわよね？良ければ聞きたいのだけど、いいかしら？」

朝陽・陽真

「ええ、もちろん大丈夫ですよ！」

俺たちはAfterglowのライブの感想を湊先輩に伝えた。多分、これからの練習に活かす感じだとは思うけど。素直にすごかった、やばかったなどといった感想を伝えた。

友希那

「ありがとう。助かったわ。」

陽真

「こんくらい大丈夫ですよ！」

朝陽

「いばんなくていいから。」

あこ

「朝陽兄と陽真さんって仲良いですね！」

朝陽

「そおー？普通だと思うけど。」

陽真

「ああ、普通だな。」

朝陽

「みなさん、俺の事は下の名前で呼んで大丈夫ですよ。リサ先輩とあこも下の名前で呼んでるんで正直、そっちの方が楽でいいです。」

陽真

「俺もそんな感じで大丈夫ですよ。」

Roseliaから了承の返事もらった。そして、趣味の話になり、

リサ

「そういえば、陽真って料理するんだね。」

陽真



「ええ、まあ、程々に。」

朝陽

「俺もこいつの料理、1回食わしてもらったことあるんですけど、めっちゃめっちゃ上手いですよ。」

紗夜

「あら、奇遇ですね。私も料理をしますよ。以前、羽沢さん家でお菓子作り教室に通わせて頂いていた時期があつてそこでハマつてしまいました。」

友希那

「リサと紗夜が作ったクッキーはとても美味しいのよ。朝陽と陽真にも1度食べてもらいたいくらい美味しいわよ。」

あこ

「リサ姉と紗夜さんのクッキー、とても美味しかったよ！また食べたい！」

燐子

「私も…です。」

リサ

「また作るね！今度さ、陽真と紗夜とアタシで一緒にお菓子作ろうよ！」

陽真

「いいですね！作りましょうよ！」

紗夜

「私も賛成です。都合のいい日に作りましょう。」

朝陽

「楽しみだなー、お菓子。陽真、リサ先輩、紗夜先輩、絶対食べさせてくださいよ？」

リサ

「もちろんだよ！絶対美味しいやつ作ってみせるから!!」

友希那

「楽しみにしてるわ。」

あこ

「あこ、待ち遠しくなっちゃいましたよ。」

燐子

「わたしも……だよ。あこちゃん……。」

そこから他愛もない会話を繰り返して、解散となった。解散した頃には外は真つ暗で時間は7時半だった。あれ？ライブ終わったの4時半とかだったよな？俺たち、2時間半くらいずっと喋ってたんかよ!!すげーな、こんな喋ったことねえーよ!!

真つ暗だったから、俺と陽真は Roselia 一同を家まで送った。その途中で Roselia と連絡先の交換をした。陽真も。

そして、送り終わったあと、

朝陽

「陽真、良かったな。Roselia のメンバーと仲良くなれて。しかもお菓子作る約束までされるなんて思ってたわ!!」

陽真

「俺もまさかあそこまでいくななんて思わなかったから正直ビックリしてるんだよ。もしかしたらこれは夢なんじゃ? っつていまでも思うし。」

朝陽

「大丈夫だ。夢じゃない。現実だよ。仮想空間じゃねえぞ。」

そんな会話をしながら俺たちは各々自宅へ帰宅した。そういえば、なんか忘れてるよ  
うな気がするけど、ま、いいか! なんとかなるっしょ!

## ライブのその後 (Afterglow編)

Roseliaと偶然ファミレスで会っているんな話で盛り上がった翌日、俺は昼休みに蘭たちから呼び出された。屋上に。まあ、理由は昨日のライブのことだろう。行けなかったって言ったのにその場にいたからな。そんなところだろ。

蘭

「朝陽、昨日なんでライブに来てたの？」

予想的中!! やっぱりそうだったのか。半分疑問で、半分驚きつつ、怒ってる？ 顔して蘭がいた。ちなみにほかのメンバーも同じ？ ような感じ？ かな。

蘭

「足立と約束あったんじゃないの？ なのになんで居たの？」

朝陽

「その約束がライブに行こうっていう約束だったんだ。ごめん、驚かせたくて誤魔化してた。許して。」

蘭

「そういうこと。来てくれたのは嬉しいけど、誤魔化したのはちよつとね。」

巴

「確かにそうだな。朝陽、誤魔化すのはあまり気に食わないな。」

モカ

「あーくん、酷いよ〜」

ひまり

「朝陽、来るなら来るってちゃんと行ってくればいいのにー。」

朝陽

「つぐみー、どうしよ…」

つぐみ

「こればかりは朝陽くんの味方にはなれないかな。自分で考えてね。」

やばい、そうとうやばい状況になってきてる。こんなことになるなんて想像してなかった。やべー、マジでどうしよう…つぐみも味方になってくれなかったし、う

わあああ！

朝陽

「すみませんでした!!!」

蘭

「謝るだけなら簡単だよね。なにかしてもらわないとね。一人一人に」

モカ

「いいね〜。モカちゃん、さんせー」

ひまり

「朝陽、よろしくね!」

朝陽

「それで許してくれますか?」

蘭

「内容によっては許さないかも。」

朝陽

「ごめんなさい!!!」

蘭

「嘘だから!! 朝陽、それで許すから大丈夫だって。」

朝陽

「ありがとう!!」

なんとかそれで許してもらえそうだ。でも、なにすればいいんだろう。一人一人についてことはたぶん内容も一人一人違うよな。財布から諭吉何人消えるんだろう。少なくとも一人消えることは確実だ。オーマイガー!!!そこで、みんな俺にして欲しいことを決めたようだ。

モカ

「あたしは山吹ベーカーリーのパン20個で許してあげる。もちろん、あーくんの奢りでね。」

つぐみ

「私は家の手伝いを一日給料なしで働いたら許してあげる。」

巴

「アタシはラーメン一緒に食へに行くで許してやる!もちろん朝陽の奢りでな!!」

ひまり

「私は、その…」

蘭

(え!?! ひまり、もしかして…)

朝陽

「ひまり、どうした? 急に黙り込んだりして。」

ひまり

「新作のコンビニスイーツ全部朝陽の奢りで買ってくれたら許してあげる!」

モカ

「ひーちゃん、また太るよ?」

ひまり

「こうなるから言いづらかったんだよね…うう、ダイエットしなきゃ…」

蘭

(ふう、よかった。)

蘭

「あたしは、その…なんというか…」

朝陽

「蘭もひまりと同じ感じ?」



蘭

「違う!!デートして欲しいの!!／／／／／」

蘭の爆弾発言により場が凍りついた。蘭の顔、真っ赤やん。夏なのになんでこんなに寒く感じるんだ? 異様な空気が漂っていた。俺はただ立ち尽くすことしかできなかつた。口が動かなかつた。我に返つたのは数十秒後だつた。

朝陽

「蘭、今、なんつった?」

蘭

「だからデートして欲しいって言ってるじゃん!!／／／／／」

モカ

「おー、蘭、やりましたな。」

ひまり

「……………」

蘭

「モカ、うるさい!!／／／／」

巴

「そんな顔で言っても説得力ないぞー、蘭。」

蘭

「巴もうるさい!! // // //」

ひまり

「……………」

つぐみ

「ちよつと、その辺にしといてあげよう。蘭ちゃん、可哀想だよ。」

朝陽

「まあ、引き受けなきゃいけないからな。するよ、デート。」

まさか蘭の方からデートに誘ってくれるなんて思ってもなかった。蘭も俺と同じ気持ちなのか? いや、まだ決めつけるのは早いよな。でも嬉しいな。蘭とデートできるなんて。こんなチャンス、滅多にないもん! 頑張らないとな!!

朝陽

「ひまり、なんでさつきから黙ったままなの? 具合悪いの?」

ひまり

「え?!いや、大丈夫だよ。心配しないで、朝陽。」

朝陽

「ならいいけど、無理はすんなよ?」

ひまり

「ありがと!朝陽!!」

あー!!諭吉、4、5人持ってかれそうだー!バイトしないと持たねえぞ、これ。普通にやばいな。これから大変になりそうだ。とりあえず頑張らないとな。普通

## 約束事（モカ編）

はああー、お金厳しいなあ：俺はそう思いながら深い溜め息をついた。あんなことしなきゃよかつたな。これに関しては全部おれが悪いけど。諭吉さんとさよならの時間が刻一刻と迫ってきてる。

今、俺はモカと商店街で待ち合わせをしている。この間の償いをするためにモカにパンを買わなきゃいけないんだよな。お金なくなるよー（血涙）

モカ

「おまたせー、待ったー？」

朝陽

「あんまり。パン、買うんだろ？」

モカ

「もち!!あーくんの奢りでねー」

そうして俺たちは目的地である山吹ベーカーリーへと歩みを進める。モカ、どれくらい買うんだろ。20個くらいって言ってたから大体そんなくらいか？いや、モカのことだからもつと買いたいような気がしなくもない。頼むからそんなに買わないでくれよ？諭吉さんと樋口さんが俺の財布の中からいなくなるから（血涙）

目的地に辿り着いた。商店街の中にあるので歩いて1分程度で着いた。

カランカラン

沙綾

「いらっしやーいってモカじゃん！そっちの人は？」

モカ

「やつほー、さーや！この子はあーくんだよー」

沙綾

「あーくん？」

朝陽

「二ノ瀬朝日です。あーくんっていうのはモカから呼ばれてるあだ名です。よろしくお願ひします」

沙綾

「あー、なるほど。私は山吹沙綾だよ。ここのお手伝いしてるの。よろしくね。あと、敬語じゃなくていいよ。同い年だろうし」

朝陽

「そっか。うん、ありがとう！」

山吹さんに軽く自己紹介をし、目当てのパンは今、モカが選んできるところだ。見た感じ、トレイに結構乗ってるな。もう20個なんて超えてそうな感じがする。ほんとに樋口さんまで持っていかれそう。バイトしないと…

モカ

「んー、このくらいで大丈夫かな〜？」

朝陽

「うん、大丈夫大丈夫。これで終わり？」

モカ

「そーだね、これで終わりにする！」

思ってたより少なかったからよかつたけど、それでも多いな、この量。会計いくらだ

沙綾

「今日は多いね。いつも10個とかでしょ?」

モカ

「今日はあーくんが奢ってくれるからいつもより多めにしたんですよ」

沙綾

「あはは、なるほどね。朝陽、なんかやらかしちゃった?」

朝陽

「凶星です」

あー、レジの数字がどんどん上がってく。おれの財布の中、ほんとにすつからかんになるぞ? そうこう考えてるうちにまた値段上がってる。あー、止まってくれー!!!

沙綾

「お会計、6790円でーす」

朝陽

「あれ？意外と安い」

沙綾

「もつと高くする？」

朝陽

「いえ、結構です!!」

モカ

「モカちゃんのポイントカードを使ったからだよ」

朝陽

「ありがとう！」

意外と安く済んでよかった。もつと高くなると思ってたから。モカのポイントカードのおかげだな。バイトは、この先のみんな次第ってとこかな。モカはパンを買ってもらってご機嫌だな。ほんとにパン好きだよな、こいつ。諭吉さんがいなくならなくてよかったー!!とりあえず今日は家に帰ってNFOやるか！



## 約束事（巴、ひまり編）

モカとの約束を果たしたあと、時間がお昼頃というのもあり、巴の約束を果たすのにちよūdいといと考えた俺は巴に電話をした。巴もまだお昼を食べていないらしく、約束であるラーメンと一緒に食べに行くことになった。

朝陽

「待ち合わせは12時半でいいか？」

巴

『構わないぞ』

朝陽

「了解」

また金がなくなつてくな。今回はそんな出費は無さそうだからすごい痛手にはならなさそうだな。それが唯一の救いかもな。

俺は時間通りにラーメン屋に行った。思ったよりも距離があつたため、少々時間がか

かかってしまった。そこにはもう巴がいた。

巴

「朝陽、遅かったな。お前なら5分前くらいにくると思ってたけどな」

朝陽

「ごめん、思ってたよりも距離があつてき。ちよつと時間かかっちゃった」

巴

「そつか。とりあえず中入ろうぜ。アタシ、お腹減つてきたんだよ」

朝陽

「それもそうだな。早く食おうぜ！」

俺たちは中へ入った。時間が時間だから混んでいるかと思つたが、意外と空いていた。すぐに席に座れて注文もできた。俺は味噌ラーメンを頼み、巴は豚骨醤油ラーメンを頼んだ。こいつ、昔からこれ好きだよな。俺も今度それが食べてみようかな。

巴

「朝陽つて昔から味噌ラーメンばっか食べてるよな」

朝陽

「そういう巴は昔からずっと豚骨醤油ラーメンばっか食ってるよな」

巴

「好きなんだから仕方ないだろ。朝陽も今度食べてみるよー」

朝陽

「それ思ってた。今度食ってみるわ」

ラーメンの話をしていたら注文したものが届いた。味噌ラーメン、うまそー！早く食いてえよ。豚骨醤油ラーメンはこってりしてそうで美味そうだな。

朝陽・巴

「「いただきまーす!!」」

朝陽

「うんめー!!味噌ラーメン最高だわ!!」

巴

「豚骨醤油ラーメンも相変わらず格別だよ！うますぎる!!」

あつという間に食い終わってしまった。マジでうますぎ。格別だなこれは。巴も満足そうな顔してるしほんとよかった。これなら奢る価値大ありだな。

朝陽

「会計済ましとくから先出てていいぞ」

巴

「ありがとな」

俺は会計を済まして店の外で待つてる巴と合流した。帰りは家まで送ってこうかな。聞きたいこともあるし。

朝陽

「そーいえばさ、いつも通りだね」

巴

「何がだ？」

朝陽

「態度とかいろいろ。前から思ってたけどもう大丈夫なのか？」

巴

「あつ！／＼／＼／＼」

察しがついたみたいだな。正直言つた俺も恥ずかしいんだよ。俺の顔、赤くなつてねえよな。大丈夫だよな。あー、恥ずかしいつたらありやしないな、ほんと。

巴

「朝陽は怒つてないのか？」

朝陽

「怒るつて何に？」

巴

「アタシが朝陽にキスしたこと。急だつたしアタシも勢い余つちやつたつていうか、その、ほんとにごめん／＼／＼」

朝陽

「なんで謝るの？別に怒つてないよ。俺、そういうの鈍感で時々分からないことあるからそういうのを踏まえてやつたんだろ？告白の仕方なんて人それぞれなんだから平気だよ」

巴

「ありがとな。朝陽が怒ってなくてよかったよ。いくら朝陽が鈍感とはいえやりすぎたかなって思っちゃってさ」

朝陽

「あー、なるほどな。俺は怒ってないから安心しろ」

柄にもないことを俺は言うなど自分で思った。巴はスッキリした感じでもう大丈夫そうだなと感じた。その後は2人で他愛もない会話をしながら帰り道を歩いた。そして、巴の家に着いた。

巴

「奢ってくれてありがとな」

朝陽

「今回は約束だったしな。元は俺が悪いし。また気が向いたらラーメン奢ってやるよ」

巴

「おー！マジか!!ありがとな、朝陽!!」

巴の笑顔、久しぶりに見たな。これならまた奢りたいって気持ちが出てくるな。俺もラーメン好きだしな。巴の家から少し歩いたところでスマホが鳴った。

朝陽

「誰からだ？」

スマホを見るとそこにあつた名前はひまりのものだった。ひまりの約束は確か、コンビニスイーツがどーたらこーたら言つてたな。あー、また出費が鳴つた出る。また俺が奢るんだらうな、これ。もうそろそろ勘弁してくれー!!まだ蘭とデートしてねえんだよ!!

朝陽

「はい、もしもし」

ひまり

「あ、朝陽!今時間ある?これからコンビニスイーツ買いに行こうと思つてたんだけど、朝陽が奢ってくれるっていうの思い出したからさ。今から奢ってくれない?そうすれば私の約束は果たされるよ」

よし、ちょうどいいな。これで3人目が終わる。残りはつぐみの1日無給料バイトと蘭のデートだったよな。蘭のやつがめっちゃ緊張するんだよな。まあまだ先のことだしまだ深く考えなくていいや。

朝陽

「いいよ。早く終わらせたいし、奢るよ。どこに行けばいい？」

ひまり

「いつものコンビニでスイーツ見て待つてるから早く来てね」

朝陽

「はい」

正直、そこまで腹は減ってないが、食後のデザート感覚で食べるのも悪くないな。自分用のとひまり用の買うのか。ひまりさん、頼むからなるべく出費おさえてね。お願いだから。

目的地であるコンビニについた。中にはひまりらしき女性がスイーツコーナーを見ている姿が見えた。ひまりで間違いないだろうな。



朝陽

「ひまり、お待たせ」

ひまり

「朝陽！ねえ、朝陽だったらこっちのシュークリームとこっちのショートケーキだったらどっちにする？」

朝陽

「どっちも買うっていう選択肢は？」

ひまり

「あ、そっか。朝陽の奢りだからそれでいいか。じゃあどっちも買おう！」

自分で爆弾を投下してしまったことに後悔した。自分も食べる気でいたからすっかり忘れてたわ。そうだった。なんのためにここに来たんだよ、俺は。財布が軽くなってる気がするな。気のせいだよな……。気のせいだと信じて俺もなにか買おうか！

朝陽

「俺はシューアイス買おう」

ひまり

「夏休みだもんね。ちようどいいよね」

その後、色々見たが、意外と量あるな。そのうちの大半がひまりのだなんて信じられないな。女の子がこんな食えるのか？それに、太りそう…

お金も結構使いそうだな、これは

朝陽

「会計済ましとくからちよつとまってる」

ひまり

「はーいー！」

会計を済ませた。一言だけ言うと、苦しい。3000円いかないかと思ってたけど、量があつて500円オーバーしました。もう、泣いていいよね？調子にのって俺も自分の買わなきゃよかった…泣きたい…

ひまり

「朝陽、だいぶ苦しそうな表情してるね」

朝陽

「出費が俺の予想を超えたからだよ」

ひまり

「ごめんねー。つい選びすぎちゃって。ふたつ食べたいものとかもあつたしさ

ー

朝陽

「はい。バイトするか」

バイトっていつでもどこかいいところあるかな？引越したばかりで何もわからないからな。

ひまりの家で食べることになった。今、俺達はひまりの家に向かっているとところだ。俺達は他愛もない会話をしながら向かった。

上原家

ひまりの部屋

ひまり

「適当に座つてて。私、飲み物取ってくるから」

朝陽

「はーい」

適当な場所に座り、俺はスマホをいじっていた。ゲームつてやつぱり楽しいね。ときどきあことあこの友達の Rin Rin さんとよく NFO するんだよな。あれもめっちゃ楽しいんだよな。そういえば、Rin Rin さんつて誰なんだ？

ひまり

「おまたせー。紅茶持ってきたよ」

朝陽

「ありがとう」

ひまり

「甘いもの食べるし、紅茶がいいなーって思ったんだよね。我ながらにナイス判断だと思うなー」

朝陽

「そうだな。ナイス判断だな」

いちいち胸張らないの。あなた、結構大きい方ですよ？自覚ねえよな、こいつは。目のやり場にすげー困るんだよな。どうしよう、ここは話題転換でもするか。

朝陽

「ひまり、早く食おうぜ」

ひまり

「そうだね。私も早く食べたくなってきちゃった。じゃあ、」

朝陽・ひまり

「いただきます!!」

巴の時もそうだけど、俺たち幼馴染は一緒になにか食う時は全員でいただきますを言うんだよな。小さい頃からずっと続いてるから今更やめれなくなったのかもな。俺はこれが意外と好きだから何も言わなかつたけどな。みんなも何も言わないし。

朝陽

「このシューアイス、めっちゃうめー!!何個か買つといてよかった!」

ひまり

「私のショートケーキも絶品だよ!コンビニのだとは思えない!」

俺達はこうしてスイーツを食べ続けた。めっちゃ美味かった。出費は苦しかったけど、これなら元は取れた感じするし、満足だな。ひまりなんか表情から幸せが溢れてるしな。

## 約束事（ひまり編、後編）

今、俺はひまりの家でスイーツを食べている。コンビニのだけど。このスイーツ、実は俺の奢りなんだよ。理由は、まあ置いといて。これが意外と美味いんだよな。高い金出して買ったかいがあったよ、ほんと。

ひまり

「朝陽、私のケーキ、食べてみる？」

朝陽

「俺もひまりと同じやつ買ってあるからいい」

ひまり

「あつそ。朝陽なんか知らない」

なんかひまり怒らせちゃったな。俺、気に触るようなことしたか？こういう時って食べさせてもらうもんなの？俺にはよくわかんねえや。自分のがあるからそれ食べばい

いやん。なんでわざわざ人の貰うのが分からん。

朝陽

「あの一、なんで怒ってらっしゃるのですか？」

ひまり

「朝陽には分からないよ。鈍感だし」

朝陽

「少しは鈍感じゃなくなってた気がしたんだけどなあ…」

朝陽

「じゃあ、俺の一口あげるから、それで許して」

ひまり

「致し方ない。それで許してあげる」

なんとかひまりの機嫌を取り戻した。怒らせたひまりの機嫌を取り戻すの、意外と面倒なんだよな。もう怒らせないようにしよ。スイーツ食ってる時の幸せな表情はどこいったんだよ。



ひまり

「早く早く!!朝陽のケーキ食べたいよ!!」

朝陽

「おちつけ。急がなくてもケーキは逃げないから。それに同じやつなんだから味も変わんねえって」

ひまり

「変わるよ…」ボソッ

最後にひまりがなんか言った気がしたが聞こえなかったから聞かなかったことにした。俺もこれ早く食いたいしな。ショートケーキ、実は結構好きなんだよね。早く食お。

朝陽

「じゃあ、初めの一口目をひまりにあげる」

ひまり

「え!?!いいの?」

朝陽

「うん。口開けて」

ひまり

「え!? え!? / /」

朝陽

「だから口開けて」

ひまり

「うん、わかった、 / / /」

朝陽

「はい、あーん」

ひまり

「あーん / / /」

俺は俗に言う『あーん』というやつをやってみた。これ、結構恥ずかしいな。意外と余裕をもっていける気がしたけど、ちよつと無理だったかもしれない。俺はやってから後悔した。俺の顔、赤くなってるなといいけど。

ひまり side

朝陽

「だから口開けて」

ひまり

「うん、わかった、／＼／＼」

朝陽

「はい、あーん」

ひまり

「あーん／＼／＼」

私は一瞬、どうしたらいいか分からなかった。あーんなんて初めての経験だし。しかも、朝陽に、好きな人に。朝陽って鈍感のくせにこういうとこ抜けてるところあるからなあ。ほんと、女心が分かってないっていうかなんていうか私にも分からないなあ。

私の顔、トマトみたいに真っ赤なんだろうな。すごい熱いもん。まさか、好きな人にこんなことしてもらえるなんて夢にも思ってたから。あーんって普通、カッブルがするやつだよな？ 私が見た事あるのはドラマとか映画とか少女漫画の中の世界でだから、自分の身に起こるなんて考えたこともなかった。しかも、不意にそれをやられたら照れすぎて死にそうになっちゃった。さすがに朝陽に迷惑かけるわけにもいかない

しなんとか耐えたけど。危なかったなあ。

あーんをしてからもスイーツを食べ続けた。結局ひまりはおなかないっぱいになり、全  
て食べきるなんてできなかった。俺は少しもらったがそれでも余ったので残りは明日  
また食べるようだ。だから最初に言ったのに。好奇心だけで買っちゃダメだと思っ  
たよな。俺は昼飯のあとにこれを食べるわけだから少しばかりおなかないっぱい  
なってしまう。ひまりはもう限界ってくらいに詰めてたけどな。

ひまり

「ごめん私、トイレ行ってくる」

朝陽

「はーい」

ひまりがトイレに行っている間にちよつとゲームしとくか。俺は最近パズルゲーム

にハマってる。パズル力を鍛えるために始めたゲームなんだけど、これが意外と楽しくてな。実はこのゲーム、陽真から進められたんだよ。あいつ、このゲームめっちゃくちゃ上手いんだよ。プロ並みに。やべーよ、あいつのパズル力は。尊敬するくらい上手い！あ、ひまり戻ってきた。

ひまり

「ごめん、お待たせ」

朝陽

「別に、そんな待ってないよ」

ひまり

「それよりこれからどうする？テレビでも見る？」

朝陽

「そうだな。テレビ見ようぜ」

そう言うと、ひまりがテレビをつけてくれた。ひまり、めっちゃめっちゃ録画してんな。

ひまり

「ドラマでいい？私、このドラマすごい好きなんだよね。恋愛系なんだけど、もうなんていうか、憧れちゃうなあ」

朝陽

「見れば分かる？」

ひまり

「うん!!見れば鈍感な朝陽くんでも分かるよ!!」

朝陽

「一言余計」

俺とひまりはその恋愛ドラマをずっと見ていた。やべーな、憧れるわ、この感じ。すげーわ。うん、やばい。

ひまり

「わかったでしょ？この感動」

朝陽

「やべーな、世の中にこんなドラマ存在したんだな」

ひまり

「憧れちやうなあ」

朝陽

「ねえ」

本当にすごかった。このドラマは。てか今何時だ？4時半か。ひまりの家に来たのが2時くらいだったか？1話分しか見てないからそんなもんか。

ひまり

「もう4時半なんだね。早いなあ。帰らなくて大丈夫？」

朝陽

「今日は平気だよ。別に時間決めてないし」

ひまり

「やったー!!」

次は歌番組を見ていた。パステルパレットっていうグループが印象に残ったな。理由としては、女優の白鷺千聖がいたからだ。あの人、すごいお方なんだなと改めて感じた。そのあとも見えていたが、だんだん眠くなってきた。ひまりと話しながら見ていたの

だが、眠くなってきた。睡魔には勝てないなあ。

ひまり side

さつきから肩が重たいなあ。なにも乗ってないはずの肩が重く感じる。肩の方を見ると、朝陽が顔に乗つけて寝ていた。すやすや寝息を立てて寝ている。朝陽の寝顔、可愛いなあ。私はテレビを消して朝陽の頭を撫でた。朝陽って意外と子供っぽいところあるじゃんと思った。

ひまり

「朝陽の寝顔可愛いなあ」

ひまり

「この寝顔見るとますます好きになっちゃうよ／＼／」

ひまり

「こういうところも含めてあなたの全てに私は惹かれていっちゃうんだよね」



朝陽

「……………スヤスヤ」Zzzz

私は朝陽に聞こえないくらいの声の大きさで独り言を呟いた。寝てるから関係ないけどね。そう思った自分がいた気がする。

私は寝ている朝陽に気づかれないようにそつと唇にキスをした。

## 約束事（つぐみ編、前編）

夏休みもあと2週間程で終わりを迎えるような時期になってきた。それでもまだ外は暑い。セミの鳴き声がほんとにうるさくてしょうがない。外に出るのはまだ億劫だ。そういえば、つぐみから時間あいたら電話してきてつて言つてたな。電話するか。

プルプルプル

朝陽

「もしもし、つぐみ？」

つぐみ

「朝陽くん、ごめんね。明日って1日時間ある？」

朝陽

「明日は暇だよ」

つぐみ

「じゃあ、わたしの家で働いて」

朝陽

「そう言う約束してたな。いいよ」

正直つぐみのが一番楽かもしれない。経済面的にね。身体的、精神的には一番きついかもしれない。だって、1日バイトって…しかも無給料で。でも、お金かかんないからその分、気持ちが軽くなるからいいけど。

翌日、俺は集合時間の朝8時の15分前に羽沢珈琲店に着いた。だいたい、このくらの時間に来ればいいかなと自分なりに考えた結果、この時間帯くらいになった。今、いろいろやり方についてつぐみのお父さんから説明されてるからそれをしっかり聞いてるってとこかな。ちよつと楽しみかも。

つぐみ父

「以上、説明は終了だ。何か分からないことがあれば聞いてくれ」

朝陽

「ありがとうございます。今日一日よろしくお願いします！」

なんとなくやり方は分かった。俺がやることは机を拭いたりレジでの会計などだ。どこのバイトも飲食店とかだと大体そういう感じなのか？バイトしたかとなないからわ

からんけど。とりあえず、今日一日頑張ろ。

カランカラン

朝陽

「いらつしやいませって蘭とモカじゃんか！」

モカ

「やつほー」

蘭

「朝陽、どうしたの？」

朝陽

「つぐみの約束がこれなんだよ。無給料で」

蘭

「つぐみにしては意外だね」

モカ

「つぐもやるね〜」

朝陽

「お客様、お席の方へご案内します」

まさか最初から知り合いが来るなんて思わなかった。あいつらはこの常連なんだろうな。幼馴染の家つてのもあるんだろうけど。俺も昔よく来てたな。なんだか懐かしいな。

つぐみ

「二通り出来てるじゃん。初めてにしてはすごいと思うよ」

朝陽

「ありがとう、つぐみ」

次の来客はまだかなと考えていると、裏口の方から誰かが入ってきた。

???

「こんにちは。ブシドーです！」

つぐみ

「イヴちゃん、もう開店してるから着替えてね」

イヴ

「分かりました！遅くなっでごめんなさい」

つぐみ

「イヴちゃん、今日は1時間遅いシフトの日だから大丈夫だよ。遅れてないから」  
イヴ

「良かったです。急いできたので遅れたと勘違いしてしまいました」

え!? イヴってあのモデルで、パスパレで、あの若宮イヴなの? え!? 嘘でしょ!! 夢、じゃないよね? 有名人に会えるなんて思ってなかったからめっちゃ嬉しいんだけど!

イヴ

「ええーと、そちらのお方はどちら様ですか?」

朝陽

「あの、俺、一ノ瀬朝陽って言います。あなたは、若宮イヴさんですよね?」

イヴ

「ご存知なんです。ありがとうございます。知ってくれている人がいると、励みになります!」

朝陽

「これからも応援してます!」

イヴ

「はい！アサヒさん、ありがとうございます！それと、私には敬語じゃなくて大丈夫ですよ」

マジか!!俺、芸能人とお友達になっちゃったよ！めっちゃ嬉しい！陽真には黙っとし。

朝陽

「休憩時間にいっぱい話そうよ！今は仕事に専念しよ」

イヴ

「そうですね。休憩時間に話しましょうね！」

つぐみ

「二人ともー、まだ休憩時間じゃないよ？」

朝陽・イヴ

「今行きます!!」

---

同時刻 蘭・モカ side

モカ

「あれー、あーくん、出てこなくなっちゃったね？」

蘭

「そうだね。裏でなんかやってるんじゃないの？」

モカ

「そうかなー？あたし的には誰かと話してたりしてるんじゃないって考えちゃうな」

蘭

「朝陽のバイトに口出すことでもないでしょ。第一、これはつぐみの約束なんだし」

モカ

「それもそうだね」

モカ、なんなんだろ。またあたしをからかってくるかと思っただけど、そうじゃなさそう。最近、モカの考えていることがわかんなくなってきたような気がする。あたしは頼んだブラックコーヒーを飲みながらそんなことを密かに考えた。

朝陽 side

早く若宮さんと話したいなー！いかんいかん、今は仕事に専念しないと。俺は机を拭きながら次の休憩時間に何を話そうかと考えていた。



カランカラン

また来客が来たな。

朝陽

「いらつしやいませ！お客様、2名様でよろしいでしょうか？」

陽真

「おいおい、何もねえのかよ!!」

リサ

「やつほー☆朝陽、バイト？」

朝陽

「まあ、そんな感じですかね」

朝陽

「お席の方へご案内します」

次の来客は、陽真とリサ先輩か。リサ先輩、どうして陽真とふたりで来たんだ？まさか、あの二人、付き合ってるのか？俺が知らない間にー!!確証は全くないけど。付き合っていないことを祈る。リア充爆ぜろ!!さーて、仕事仕事！

朝陽

「つぐみー、次はどうすればいい？」

つぐみ

「お皿とか洗つといってくれる？」

朝陽

「了解」

つぐみ

「イヴちゃんはレジの方お願い」

イヴ

「分かりました！」

一通り終わり、来客の対応等をして、気がいたら時刻は昼過ぎになっていた。俺と若宮さんは休憩時間になった。

朝陽

「若宮さんってここでバイトしてても大丈夫なの？事務所の許可とか必要なんじゃない？」

イヴ

「事務所の許可はちゃんともらってますよ。それに、ここでバイトしていると、みなさんか

ら声をかけてくれるんです。それって私たちのことを知ってくれてるって言うことだ  
と思うんです。それが私の励みになっていくんですよ！」

朝陽

「なるほど。若宮さんってすごいね！ファン俺だったらアイドルの活動をしてバイトも  
してだったら身体が持たないよ」

イヴ

「ファンのみなさんもここでのバイトを応援してくれているので、私としては本当に嬉  
しいです!!」

朝陽

「だよね！俺も若宮さんの立場だったらそう思う！ファンの人の応援ってすごい励みに  
なるんだな！」

若宮さん、ほんと凄いな。俺だったら3日も持たないかもしれない。女の子なのにす  
ごいよな。体力もあるんだろうし。すぐメンタルやられそう。うん、絶対やられる。1  
週間したらひたすら泣いてそんな感じする。

イヴ

「あと、私のことは下の名前で呼んでくれませんか？」

朝陽

「え!?! いいの？」

イヴ

「はい！私もアサヒさんのこと下の名前で呼んでますし」

朝陽

「イヴがいいならそれで」

イヴ

「ありがとうございます！」

もうここまで進展しちゃったよ!!俺もすごいな。今日会った女の子とここまでの関係になれるなんてすごくない?俺はふとそう思ってしまった。

その後もイヴと学校ではどう過ごしてる?だとか普段何してる?だとか色々話して話題が尽きることはなかった。とても楽しい時間だったな。しかもアイドルとこんな話す機会つてこれから先あるのか?そうして、俺たちの休憩時間は有意義なものとなり終わりを迎えた。よし!午後の仕事も頑張るぞ!

イヴ

「アサヒさん、午後の仕事も頑張りましたよね！」

朝陽

「おう！頑張ろうな!!」

よし、折り返しだ！蘭とモカ、陽真とリサ先輩はまだ居るな。ずっと話してるし。よくあんなに話してられるな。まあいいや、とりあえず仕事仕事!!

イヴ

「いらつしやいませ。お客様、3名様でよろしいでしょうか？」

客A

「はい」

イヴ

「では、お席の方へご案内します」

イヴ、さすがだな。後ろの2人、完全にイヴに気付いてたな。バイト中だから声かけないでくれたのかな？いい人達だな。

つぐみ

「朝陽くん、ちよつと来てくれない？」

朝陽

「分かった」

朝陽

「イヴ、あのお客さんの注文、任せてもいい？」

イヴ

「大丈夫です！」

俺は注文をイヴに任せてつぐみの方へ向かった。いったい、何があったんだろう。向かってみると、頼み事をされた。

つぐみ

「悪いけど、蘭ちゃんとモカちゃんの様子見てきてくれない？」

朝陽

「え？それって俺じゃなきやダメな感じ？」

つぐみ

「朝陽くんじゃなきやダメなの」

朝陽

「…分かったよ」

つぐみ

「ありがとう！」

朝陽

「一応理由聞いていい？」

つぐみ

「えつとね…」

このちよつと前

蘭side

さつきからイヴと朝陽が仲良く仕事の話してるのがちよつと…気にくわないんだよね。そういうのもあつてか、2人を目で追っっちゃう。もう、重症だよ。でも、あたしと朝陽はデート行く約束してるし。

モカ

「蘭く、さつきからイヴとあーくん目で追ってるけどどうしたの〜？」

蘭

「べ、別に追ってなんか…／＼／＼」

あーあ、モカには勘づかれちゃったな。モカって昔からあたしのことよく見てるからね。だから、こういうところ、鋭いんだよね。

モカ

「もしかして、嫉妬してる〜？」

蘭

「は、はあ！ちよ！モカ、何言ってるの？／＼／＼／＼」

モカ

「そんな顔で言われても全然怖くないなあ〜」

蘭

「もう知らない！／＼／＼／＼」

自分でも認めたくないけど、明らかに嫉妬してます。朝陽と仲良くしてるイヴに確実



に嫉妬しています。また顔が熱くなってきた。あたしって意外と嫉妬深かったりするのかな？

モカ

「つぐー、ちよつといい？」

つぐみ

「ん？なに？モカちゃん」

モカ

「あーくん呼んでくれない？それであたし達のところになさ、ムグ」

蘭

「モカ、もうやめないと強めに殴るよ？」

モカ

「はいー、すみませんでした。」

つぐみ

「と、とりあえず朝陽くん呼んでくるね」

蘭

「あ、ちよ！つぐみ！…行っちゃった…」

もうダメだ。朝陽とは後でじっくり話そう。

朝陽 side

---

つぐみ

「ていう感じなの。」

朝陽

「あー、なんとなく分かったよ」

朝陽

「とりあえず、蘭とモカのところに行けばいいんだろ？」

つぐみ

「そう。だからお願い」

## 約束事（つぐみ編、後編）

朝陽

「蘭、つぐみに用あるって言われて来たけどどうしたの？」

蘭

「ほんとに来ちやつたし…」

朝陽

「え！来ちやまずかった？」

蘭

「そんなことはないけど…」

え、何この空気感。モカなんかずっとニヤニヤしながら見てるし。あー、どうしよ。戻った方がよさそうなのか？

朝陽

「用ないなら俺、仕事に戻るけど？」

蘭

「朝陽、ちよつと待って！」

朝陽

「なに？」

蘭

「明日、予定ある？」

朝陽

「特にないけど」

蘭

「あたしの家来て。時間はL I O Eするから／＼」

朝陽

「あー、はい」

なんか成り行きで蘭の家行くことになっちゃったけど大丈夫なのか？蘭のお父さんってそういうところ厳しいんじゃないかなかったっけ？いや、違ったか？まあいいか。とりあえず仕事に戻るか。

陽真

「朝陽ー、ちよつといいか？」

朝陽

「なんででしょうか？お客さま」

陽真

「コーヒー追加で。砂糖3つよろ」

リサ

「アタシも注文いい？」

朝陽

「どうぞ」

リサ

「チョコレートパフェお願い」

朝陽

「かしこまりました」

陽真の言い方に店員として少し腹たったが、まあいいか。一応友達同士だし。てかな

んで陽真のやつ、リサ先輩と2人で来てるの？え？意味わかんねえ。あとで問い詰めるか。

陽真 side

リサ

「朝陽、何も聞かなかったね」

陽真

「仕事中つてのものあるんじゃないですか？それより、何かありました？」

リサ

「いや、特にないけど」

陽真

「何かあったら言ってくださいね？俺でよければ相談のるんで」

リサ

「ありがとね、陽真。やっぱり朝陽と一緒に優しいね」

陽真

「そんなことないですよ」

リサ先輩、やっぱり可愛いな。この人は笑ってないとな。思いきって誘って正解だったよ。おかげで今の時間まで話題が尽きることなく話せてるし。こんなに可愛い人と一緒に時間を過ごさせてるって俺、幸せ者だよな？

朝陽

「お待たせしました。コーヒーとチョコレートパフェでございます」

陽真

「サンキュ、朝陽」

リサ

「ありがとう☆」

朝陽

「失礼します」

パフェ食べてるリサ先輩の顔、超幸せそうな表情浮かべてる。マジで可愛いじゃん！  
こんな人、世の中にいたんだな。俺、幸せ者だわ。めっちゃ可愛い！

リサ

「陽真、どうした？アタシの顔になにかついてる？」

陽真

「あ、すみません／＼／＼何もついてないですよ」

俺、リサ先輩のこと好きになっちゃったかも

朝陽 side

---

朝陽

（あともう少しだ。頑張るぞ!!）

時計を見ると、時刻が午後3時になっていた。羽沢珈琲店は午後5時閉店だからあと約2時間つてところだな。よし、あと少しだ！頑張るぞ！えいえいおー！

つぐみ

「朝陽くん、大変そうだね。でもあと少しだから頑張つてね！」



朝陽

「ありがとう、つぐみ！俺、やることなくなっちゃったから次は何すればいい？」

つぐみ

「空いてる机、拭いてくれる？」

朝陽

「了解!!」

やることが出てきた。机を拭きに行くぞ！無給料だけどやってみると意外とやりがいがあるな、こういう仕事って。たまにはこういうのも悪くないな。

蘭side

モカ

「あーくんとお家デートの約束しちやっただねー」

蘭

「べ、別にそういうつもりじゃ、／／／」

モカ

「またまた、イヴに嫉妬してたくせに。」

蘭

「／＼／＼！だから嫉妬してないってばー！！」

もう、モカって調子にのるとすぐこうなるんだから。でも、朝陽を家に呼べたのは大きな一歩だよ。昔ならなんの気兼ねもなく誘えたんだろうけど。今はちよつと照れちゃって難しかったけど、なんとか誘えたからよかった！！

朝陽 side

レジの会計とか食器洗いとかいろいろやっていたら気づいたらもう5時になる前だった。さすがに陽真とリサ先輩、蘭とモカ、その他のお客さんはもう帰ったけどね。そろそろ終わりかな？

つぐみ

「朝陽くん、イヴちゃん、もう上がって大丈夫だよ」

朝陽

「はーい」

イヴ

「お疲れ様です!!」

イヴ

「アサヒさん、今日はお疲れ様でした!」

朝陽

「イヴもお疲れ様!もうくたくただよ」

イヴ

「私はまだ大丈夫です!」

朝陽

「イヴって結構体力あるんだな」

イヴ

「そうでもないですよ」

朝陽

「そうか?そんなことないと思うけど」

イヴと話しながら帰る準備をしたからもう帰るとするか。

朝陽

「送ってかなくて平気か？ いや、まずいよな。アイドルが男と2人で歩いてたら問題になるよな」

イヴ

「はい。まだ外は明るいので送ってかなくて大丈夫です。そうですね。私たちアイドルはそういうところは気をつけないといけないので。でもアサヒさんの好意はとても嬉しいです！ ありがとうございます！」

あ、よかった。イヴのことだから意外と大丈夫とか言いそうだったから。こういうところはちゃんとしてるんだな。よし、帰るか！

朝陽

「じゃあな、イヴ！ また会おうな！ お疲れ様ー」

イヴ

「はい！ また会いましょう！ お疲れ様でした！」

俺は帰路について今日あったことを振り返った。

## 美竹家にお邪魔します

つぐみの家で無給料バイトをした翌日の朝8時、蘭からL I O Eが来ていた。

L I O E内にて

蘭

『10時にあたしの家に来て』

朝陽

『りょーかい』

既読をつけて返事をした。ちなみに蘭のL I O Eで目が覚めた。めちやくちや眠い。まだ2時間もあんのかよ、もう少し寝よ。

??? 時間後

朝陽

「やべっ!!寝すぎた!!」

起きて時計を見たら時間が10時の15分前だった。俺の家から蘭の家は歩いて1

5分くらいかかる。まだ何も準備してないからもう絶対間に合わない。チャリ使えばワンチャンなんとかなるな。よし！チャリ使おう！

ここから急いで準備をした。財布とスマホを持ってカギをかけて家を出た。

10時の3分前

朝陽

「はあはあ、なんとか間に合った…はあはあ」

疲れた体でインターホンを押した。家の中から蘭が出てきた。

蘭

「いらっしやい、朝陽。ギリギリだね」

朝陽

「間に合わないかと思ったよ。ギリギリセーフで良かった！」

蘭

「だね。入って」

朝陽

「おじゃましまーす」

俺は久しぶりに美竹家にお邪魔することになった。蘭の家には引越しする前は2、3度しか行ったことがなかった。道は覚えていたから何とかだったが、本当に久しぶりだ。相変わらず大きい家だなー。

蘭の部屋に案内された。両親が華道の集まりで今日1日いないらしいのでそのまま行つていいと言われた。家具とかもだいぶ変わっていた。最後に来たの小学生の頃だからそりやそうか。

蘭

「飲み物とお菓子持ってきたよ」

朝陽

「ありがとう。急いできたから腹減ってたんだ」

蘭

「そうだろうと思つてね。お昼近いんだし食べすぎないでよ?」

朝陽

「お前は俺の母親か!」

いかにも蘭が母親らしいことを言つたから俺はそのままツツコミを入れた。蘭は学



校じゃだいたい1人でいるか俺たちと一緒にいるかだから。俺と蘭は同じクラスだけど、俺にも友達はあるからそいつらとつるんでもあるんだよ。例えば、陽真とかな。ん？あ、そうだ！

朝陽

「ねえ蘭。陽真とリサ先輩についてなんか知らない？」

蘭

「いや、何も知らない。ん？あ、なるほど」

朝陽

「なんとなく察したみたいだな」

俺が聞きたいことと蘭の察しが合ってれば恐らく、俺が聞きたいことは分かるだろう。

蘭

「確かに、昨日つぐみの家に二人でいたね。足立とリサさん」

朝陽

「そーそー！なんで2人で来たんだろうなーって思ってたさ」

どうやら合ってたようだ。こんくらい分かってくれなかったら困ってたが。

朝陽

「あの二人、付き合ってたんじゃない？って思うんだけど」

蘭

「朝陽の口からそういう言葉が出るなんてね」

朝陽

「いやいや、俺だって恋バナくらいするわ」

蘭

「その割には結構鈍感だよな」

朝陽

「みんなそれ言うよな…」

俺がどのくらい鈍感なのかが全く分からない。というか、これ自分でわかるやついるのか？自分としてはだいたい敏感な方だと思ってただけだな。みんな鈍感鈍感言うか

らほんとに鈍感なんだろうな。

朝陽

「んで、蘭はどう思う？あの二人の関係性」

蘭

「まだ付き合っていないんじゃない？」

朝陽

「どうしてそう思うんだ？」

蘭

「ただ仲良く話してただけでしょ？あたしから見たらあれはカフェデートみたいな感じに見えるけどね」

蘭

「あたしは足立とすごい仲良いって訳じゃないからなんとも言えないけど」

朝陽

「なるほどなあ」

女子から見たらそんな感じなのかな？俺的にはもう付き合ってるんじゃないかって

思ったから意外だな。まあ、陽真が誘ってそれにリサ先輩がのってデートみたいになつたつてのがオチなんだろうな。リサ先輩があいつのこと好きになるなんて多分ないかな。

今の時間はお昼頃を指していた。そろそろ昼飯かな。どっか行く感じか？

蘭

「もうそろそろお昼にしようか。何がいい？あたし作るけど」

朝陽

「いや、やめろ。飯なら俺が作るから」

蘭

「じゃあ2人で作ろ」

朝陽

「そうだな。そうするか！」

まだマシかもな。蘭は昔から料理が出来ない。今はどうか分からないが、昔はだいぶやばかった。卵を握りつぶして割ろうとしたやつだからマジで怖いんだよ。さすがに今はもうそんなことはしないだろうけど。作るものはオムライスだ。今の蘭はさすが

に卵は握りつぶして割ろうとしなかった。うん、さすがに大丈夫だな。俺は料理は人並みにはできるからなんとなく分かる。2人で協力しながらオムライスが完成した。うん、美味そうだ。

蘭・朝陽

「いただきます!!」

蘭

「うん、美味しいね。ケチャップと合う!」

朝陽

「それわかるわ!オムライスと言ったらやっぱりケチャップだよな!」

蘭

「オムライスにケチャップ以外のものかける人っているの?」

朝陽

「さあ?いるんじゃない?」

蘭

「適當すぎ」

「その後も2人で楽しく談笑しながらオムライスを食べた。味は、美味しかった！一時はどうなるかと思っただけど、2人で作ったらとても美味しかった。食器洗いも2人でやった。楽しかったな。」

午後はテレビを見たりAfterglowのCDを聞いたりゲームをしたり色んなことをした。気づいたらもう夕方で帰る時間になった。

蘭

「え？もう帰っちゃうの？」

朝陽

「そのつもりだけど。もしかして寂しいのか？」

蘭

「は！／＼／＼、別に寂しくなんかないし／＼／」

朝陽

「分かったよ。もう少しいてやるから、拗ねるなって」

蘭

「拗ねてないし寂しくもない！帰るんなら帰れば？」

朝陽

「もう少しいるよ」

そう言った瞬間の蘭の笑顔にドキツとしたのは俺だけの秘密。ゲームをやるうとス  
マホを取り出そうとした時に左腕に抱きつかれてる感触がした。この部屋には二人し  
かない。蘭だった。

朝陽

「あの一、どうかなさいました？／＼」

蘭

「少しだけこうさせて／＼」

朝陽

「はいはい／＼」

顔を赤らめて言う蘭の顔から目線を背けてしまった。だって、腕に抱きつかれて上目  
遣いでそう言われたら誰だってそうなるだろ。しかも相手は好きな人だぜ？マジでや

ばいんですけど。心臓バクバクなただけ。今の俺の顔、めっちゃ赤い気がする。

朝陽

「もういい？／＼／＼／＼」

蘭

「まだ／＼／＼」

正直もう限界。まだこうしてたい自分もいるけどもう俺の理性が持たない。だって、顔擦り付けられてるし。蘭ってこんなやつだったっけ？普段はクールって感じだから甘えてくる感じしなかったけどな。ふと、蘭の顔を見ると、めっちゃ笑顔だった。やばい、めっちゃ可愛い。もつとこの顔見てたいけどさすがにやばくなってるから見るのやめよう。すると、満足したのか蘭が左腕から離れた。

蘭

「ありがと。朝陽／＼／＼」

朝陽

「顔赤くするくらいならやんなきゃ良かったのに／＼／＼」



蘭

「朝陽だつて赤いじゃん！人の事言えないよ！」

朝陽

「自覚しております」

やっぱり俺も顔あかかつたわー！だつて顔熱いもん。うん、これを耐えた俺凄いで。甘えてくる蘭を間近で見れて良かったよ、ほんとに。もつと好きになつちまうわ。さて、今度こそ帰ろうかな。

朝陽

「じゃあ、そろそろ帰るわ。約束、これで終わりでもいい？」

蘭

「ダメに決まつてるでしょ」

朝陽

「えー！なんで!?!」

蘭

「これはあたしが朝陽に1度家に来てほしかつただけ。一応これもあたしから見たらデートだけど、まだ外に遊びに行つてないでしょ？外にデートに行ったら終わりでもいい

よ。だから、また今度デート行こ！」

朝陽

「あー、はい。仕方ねえか。また今度な。俺も実際楽しみだからまた今度デート行こうな！」

蘭

「うん、絶対だよ！」

朝陽

「ああ！」

朝陽

「じゃあな」

蘭

「バイバイ」

そうやって俺は帰路へついた。少しは前に進んだよね？それなら嬉しいな。いつか蘭と付き合える日が来るといいな。

蘭 side

嬉しい！朝陽があたしとのデート楽しみにしてくれてるなんて！デート当日はいつもよりオシヤレに気を遣わないと。その時になったらひまりに相談して着ていく服決めてもらおう。つてちよつと気が早い気もするかな。今から楽しみだなあ！！

## いつも通りの日常がまた

楽しかった夏休みも昨日で終わり、今日から2学期が始まる。またつまらない授業を受けることになると考ええると、苦痛でしかない。俺はベッドから起きあがり、制服に着替えた。朝ごはんも済ませ、幼馴染たちとの待ち合わせ場所に向かう。

意外と早く起きたため、みんなまだ来ていなかったようだ。向こうから誰かが来た。つぐみだ。

つぐみ

「あ、朝陽くん。先に来てたんだね。珍しいね」

朝陽

「朝早く起きすぎたみたいでさ。いつもの俺なら時間ギリギリで来るのにな」

つぐみ

「ふふ、そうだね。あ、今日の放課後、うちにこれる?」

朝陽

「え!? どうして?」

つぐみ

「渡したいものがあるってお父さんが言ってたから来て欲しいの」

朝陽

「うん、分かった。放課後、そっちに行くよ」

つぐみのお父さんが俺に渡したいものってなんだろう。放課後分かることだし今は考えなくてよさそうだな。つぐみが来た方向から2人きた用だ。蘭とひまりだ。

ひまり

「おまたせ!」

蘭

「おまたせ。巴はモカ起こしてから行くから先行ってって言ってた」

朝陽

「モカも相変わらずだな。2学期から早々遅刻しないといいけど」

つぐみ

「それじゃあ、学校行こう!」

学校に行ったら始業式がある。校長のくだらない話を聞かされて校歌を歌って終わりの意味の分からない式がある。今度はモカと陽真が寝てたら俺もうたた寝しようかな。だってつまんないじゃん。それだったら家でNFOやってた方が数百倍楽しい。早くあことRin Rinさんとやりたいな。みんなで談笑してたら学校に着いていた。

ひまり

「じゃあまた放課後ね」

朝陽

「ああ、またな」

そして各々クラスに入っていく。陽真はまだ来てない。あいつに聞きたかったことあったんだけどな。あいつが来るまで蘭と話してよ。まああいつはいつも時間ギリギリだから無理そうだけど。と思ったら陽真が時間に余裕を持ってきていた。

朝陽

「陽真、お前珍しくね？時間に余裕を持って来るなんて」

陽真

「まあな。俺だつてこういう時はあるぜ」

蘭

「あ、足立じゃん。この間、なんでリサさんと2人でつぐみの家にいたの？」

蘭 ナイス!!俺もそれめっちゃ聞きたかった!

陽真

「あー、そのことか。実は…俺、リサ先輩と付き合うことになったんだ」

蘭・朝陽

「はあああ!?!」

朝陽

「え!?!あの時が初めてのデートじゃなかったの?」

陽真

「あの時が初めてのデートだよ。その次のデートで俺から告った感じ」

蘭

「あんたからなんだ。すごい意外なんだけど。リサさんからしたのかと思った」

陽真

「いや、俺だってそこまでヘタレじゃねえよ」

陽真の恋愛の話しで盛り上がっていると、先生が入ってきて始業式が始まると言われた。さて、始業式が終わったら今度こそあいつを問い詰めるぞ！陽真、覚悟しとけよ！

蘭

「あんたって恋愛に関してだいぶ鋭くなったよね」

朝陽

「元から鋭いぞ？」

蘭

「そんなわけないでしょ！」

体育館に向かうまでの数分間、俺たちは話しながら向かった。そして、始業式が始まった。

校長

「2学期が始まり…」



はい、長い長い校長の話が始まりました。なんで毎回毎回話すかね。そして安定して陽真とモカは寝てるな。よし、俺もうたた寝しよ。  
そして、始業式が終わり、教室に戻った。

朝陽

「お前、やっぱ寝てたな」

陽真

「あれで寝ないやついたら逆に尊敬するわ。お前も寝てただろ？」

朝陽

「まあな。お前とモカがうたた寝してたから俺も寝た」

陽真

「なんだよそれ」

陽真と2人で談笑していると担任がやってきた。よっしゃー、もう帰れるぜ！早く帰りてえなあ。つぐみの家行かねえとあれだしな。担任、早く話終わらせてくれー。意外と早めに話を切り上げてくれた。よし、陽真も連れてくか。

朝陽

「陽真、今日つぐみの家行く」

陽真

「どこだよ、それ」

朝陽

「羽沢珈琲店」

陽真

「あー、あそこね。いいぞ。どうせリサ先輩との事聞きたいんだろ？」

朝陽

「当たり前だろ」

ちようど隣のクラスも終わったらしく、つぐみ達を待った。今日は珍しく陽真を含めた6人での下校になる。まあ多分これで終わりだろうけど。

巴

「つぐー、アタシたちも今日そっち行っていいか？」

つぐみ

「いいよ。朝陽くんもそのまま来る？」

朝陽

「そうさせてもらうよ。あと、こいつも連れてくから」

陽真

「よろしくです」

つぐみ

「あ、この間リサ先輩と一緒にいた人だ！」

モカ

「おお、それは興味深いですな。あたしも行くこゝ」

ひまり

「私もそれ興味あるから聞かせて！」

陽真、ドンマイ。この後のお前の運命は俺は知らん。ご武運をお祈りします。

羽沢珈琲店へ向かう際、陽真は案の条質問攻めにあっていた。リサ先輩のどこに惹かれた？とか、どつちから告白したの？とかいろいろ質問されてた。

羽沢珈琲店についた。ここでも同じく質問攻めだった。俺も興味あるからずっと聞

いてたけど、やっぱり面白いね。

陽真

「おい、朝陽！黙ってねえで助けるよ！」

朝陽

「んー？何をー？それより、今の状態、リサ先輩が見たらなんて思うんだろうねー」

陽真

「凄いやばいです。まさか!!」

陽真はキョロキョロし始めた。いや、さすがにいないだろ。うん、いないいない。さて、ここから俺も加わろうかな。

陽真のことについて話すと長くなるから全部まとめると、まず告つたのは陽真から。やっぱこういうのは男からするもんなのかね。付き合い始めたのは夏休みが終わる1週間前らしい。2回目のデートの終わりに告ってそこから付き合い始めたって言うってたな。陽真がリサ先輩に惹かれた理由は笑顔が可愛いとところと面倒見がいいところらしい。本人は全部って最初は言ってたけど、絞りに絞って言った感じだったかな。

んー、まあこんな感じかな。今度はリサ先輩にも聞いてみたいな。陽真のどこに惹かれたのか。

ざつとまとめるとこんな感じかな。陽真のやつ、羨ましいぜ、全く。俺も早く蘭と付き合いたいなあ。

## 羽沢珈琲店で

あの後、陽真はやっぱり質問攻めをくらってた。そりゃリサ先輩と付き合ってるって突然言われたらそうなるわな。特にひまりがやばかったな。ひまりは多分あいつらの中でいちばん恋バナに興味を持つてるだろうからやばかった。質問の量が他のみんなより多すぎる。もう、やばいな。語彙力を失うくらいに。俺も多少は質問した。今後、陽真に相談することが増えるだろうし。

みんなが帰ってつぐみと2人になったところで本題となった。俺は今日つぐみに来てほしいと言われて来た。その要件をまだ済ませてなかった。

朝陽

「そういえば、用ってなんなんだ？今、俺とつぐみしかいないし大丈夫だろ？」

つぐみ

「えーと、これなんだけど…」

つぐみが渡してきたのは茶封筒だった。これってもしかして、お金？え？なんで？俺

無給料のはずじゃなかったっけ？いや、お金とは限らない。別の何かの可能性もある。そつちを信じよう。

朝陽

「これ、何？」

つぐみ

「お金。お父さんからさつき渡されたの」

朝陽

「でも、俺無給料で1日バイトしてたんじゃないの？」

つぐみ

「私もそのことお父さんに言っただけだね。予想以上に一生懸命働いてたから少しのお礼だつて。返金はできないって」

朝陽

「そうか。じゃあ、今回だけはつぐみの父さんに甘えさせてもらおうかな」

本当にこのお金、貰っていいのかな？お礼されるようなこと全くやってないのに。すごい不安。マジで貰っていいの？うーん、悩むなー。

つぐみ

「私も、その、正直お金あげていいかなって思った。朝陽くん、ほんとに一生懸命働いてくれてたし、イヴちゃんと1日で仲良くなってるんなこと必死でやってくれてたから。私はお金のことは言えないけど、私は貰ってもいいって思うよ。正直驚いちゃった」

つぐみ父

「朝陽くん、そのお金、貰ってくれないかな？1日分の給料として少ないけどほんの少しのお礼として貰ってくれ」

朝陽

「そんな、少ないだなんてとんでもないです。お金貰えるなんて思ってなかったですし。つぐみの父さんがそこまで言うなら、貰います」

つぐみ父

「そうしてくれるとありがたい。今回は甘えてくれ」

朝陽

「本当にありがとうございます。じゃあ、俺、帰ります。お疲れ様です」

つぐみ父



「お疲れ様。気をつけて帰れよ」

つぐみ

「じゃあね、朝陽くん」

朝陽

「じゃあな！」

結果的に貰うことになっちゃったけど、つぐみもつぐみの父さんもあそこまで言つて返すのも逆に失礼だよな。今度、このお金でつぐみになんか買ってあげようかな。このお金は大事に使っていくか。そう思い俺は帰り道を歩いた。

そういえば、陽真かわいそうだったなー(棒)。リサ先輩、いなかったからよかつたけどね。あ、そうだ！2人からいろいろ聞けばなにかヒントを得れるかもしれないな！ついでにどこまで進展したかも聞きたいなあ。よし、聞いてみるか。電話しよ。

朝陽

「もしもし。リサ先輩ですか？」

リサ

『朝陽じゃん。珍しいね。どうしたの？』

朝陽

「明日って空いてますか？」

リサ

『空いてるよ』

朝陽

「相談したいことがあるんで明日、陽真とファミレスに来てくれませんか？」

リサ

『ちよつと待って。アタシと陽真が付き合ってるの知ってるの？』

朝陽

「ええ。今日、陽真が嬉しそうに言っていましたよ」

リサ

『あちゃー。まあいいや。明日、陽真とファミレスに行けばいいんだね？』

朝陽

「はい。よろしくお願いします。陽真には俺から伝えておきます」

リサ

『はーい。じゃあ、また明日ー』

朝陽

「はい、またあし…ってリサ先輩が通話切っちゃった！」

次は陽真か。まああいつも空いてるだろ。電話電話つと。

朝陽

「もしもし。陽真か？明日空いてるよな？」

陽真

『空いてる前提で言うのちよつと寂しいんだけど。まあ空いてるけどさ』

朝陽

「相談したいことあるから明日リサ先輩とファミレスに来てほしいんだけど」

陽真

『リサ先輩には伝えてあるの？』

朝陽

「バツチリよ！リサ先輩も来るって言ってたから来いよ？」

陽真

『はいはい、言われなくても行きます』

朝陽

「ありがとな。じゃあな」

陽真

『ああ。じゃあな』

明日、2人からなんかヒントかアドバイス貰えるといいな。人生の先輩方からのアドバイスは大事にしないと。よし、頑張るぞ！

その後、少し歩いて家に着いた。初日から結構長い1日だったな。

## 恋愛相談（改）

辛い辛い授業を乗り越えた俺は学校帰りに近くのファミレスに向かっているところだ。ん？授業をちゃんと聞けつて？つまらない授業する先生が悪いんだ！赤点は取つたことない！本当だ！

なんで俺がファミレスに向かっているのかというと、俺の友達と先輩が付き合ってるらしいから俺の恋愛相談にのってもらいたいからだ。なんであいつが俺より先に彼女作るかね…負けたわ。

ファミレスに着いたら例の2人が4人席に隣同士で座っていた。目の前でイチャつかれるとこつちにも結構来るもんがあるんですよ？リア充のお二人さん？でも2人も俺のために来てくれたんだよな。そこだけは感謝しないと。

店員

「いらつしやいませ。お客様…」

朝陽

「あ、待ち合わせです」

店員

「かしこまりました」

その後、俺は現在進行形でイチャイチャしてるリア充のお二人のところに行った。2人はキョトン顔でこつちを見たが、俺の気持ち分からないのか？非リアの気持ちだが。好きな人いるのにチキって告げないやつにリア充をとやかく言う筋合いはないと思うけど。でもなんかイライラするな。

リサ

「朝陽、なんで怒ってるの？」

朝陽

「きつと貴方方には俺の気持ちなんて分からないですよ」

陽真

「俺には分かるぞ。俺とお前は気持ちで通じあってるからな」

朝陽

「気持ち悪いこと言うなよ。リサ先輩怒るぞ？」

リサ

「もう遅かったりするかもね」

陽真

「ごめんなさいごめんなさい。今度なんか奢るから許して！」

え？陽真、リサ先輩に敬語じゃない？え？もうそこまで行つたの？ペース早くね？まだ2学期始まつて数日しか経つてねえよ？もう俺のポンコツ頭じゃ限界だわ。

リサ

「えーとね、ここまでの過程を話すとちよつと長くなるよ？」

朝陽

「今はとりあえず付き合い始めてからの過程を話してください」

リサ

「分かつた。まず陽真が敬語じゃなくなったのは昨日のことなんだ。アタシから敬語はやめてつて言つたの。最近は手を繋いで下校することだつてあるんだよね。付き合つて2週間とちよつとくらい経つけど早いとは感じないかな、アタシは。周りがどう思うかは知らないけどね。その人たち次第だと思ふよ」

陽真

「まあ、やっぱりそうだよな」

リサ

「陽真、やっぱ分かってるね〜」

リア充爆ぜろリア充爆ぜろ！非リアの前でイチャつくくな！もう俺の気がおかしくなりそだ。なんで2人連れてきたんだ。イチャイチャするのを見せてただろ…1人ずつ聞けばよかった…

朝陽

「イチャイチャはそこまでにして、この後どうすればいいですか？パイセン方」

リサ

「んー、もう告白しちやえば？」

陽真

「勢いに任せて告白するのもありだと思っぞ？」

朝陽

「いい加減に答えないでちゃんとした答えが欲しいんですよ」

リサ



「何回かデートするとかは？」

朝陽

「デートしようっていうのはなんか蘭が言ってたような…」

リサ

「なら尚更デートしなきゃ！蘭も朝陽のこと好きだと思っようよ！」

え!?今、蘭が俺のこと好きって言った？嘘じゃないよな？でもなんか違っような気がするんだよな。確信が持てない…本当に蘭が俺のことが好きなのか…あいつ、俺の事単なる幼馴染としか見てないんじゃないか？少し自意識過剰な気がする。

陽真

「一応書くにするけどデートしようって言ったのは美竹さんの方からだよな？」

朝陽

「そっうだ」

陽真

「確定だな」

リサ

「だね。もう大丈夫だね。告白とまでは行かなくてもデートするくらいなら出来るでしょ？ 幼馴染なら2人で出かけるくらいはしたことあるでしょ？」

朝陽

「まあ、ありますけど」

リサ

「そんな感じで大丈夫だから。ね？ 出かけてみな」

朝陽

「はい」

俺、間違っていないよな？ 相談する相手。リサ先輩に前相談した時は非リアだったもんな。陽真と付き合って浮かれてんのかな？ 多分俺も同じような感じになるんだろうけど。とりあえず頑張ってみようかな。

朝陽

「頑張ってみますよ。俺、自意識過剰じゃないですよね？」

リサ

「案外そうだったたり？」

朝陽

「意地悪しないで教えてくださいよ！」

陽真

「平気じゃね？美竹さん、絶対お前のこと好きだろ」

リサ

「アタシもそう思うよ。だから、朝陽は自意識過剰じゃない。これで少しは気晴れた？」

朝陽

「はい、だいぶ晴れました」

リサ先輩は軽く頭を撫でてくれた。こう見えても意外と面倒見がいいからな、この人は。て、あつやば!!後がめっちゃ怖い。やばい、どうしょ。とりあえず、その場しのぎで

朝陽

「リサ先輩、こういうのは彼氏にすることですよ? (震え)」

リサ

「あ、ごめんね、陽真。朝陽に嫉妬しちゃった?」

陽真

「うん、まあ。俺以外の男にそんなことしたら嫉妬くらいするだろ。朝陽、後で覚えとけよっ。」

朝陽

「俺は無実だー!!」

この後、ファミレスをあとにした後、俺は陽真にコテンパンにやられた。偶然通りかかった蘭が陽真のことを軽く懲らしめたのはまた別の話である。